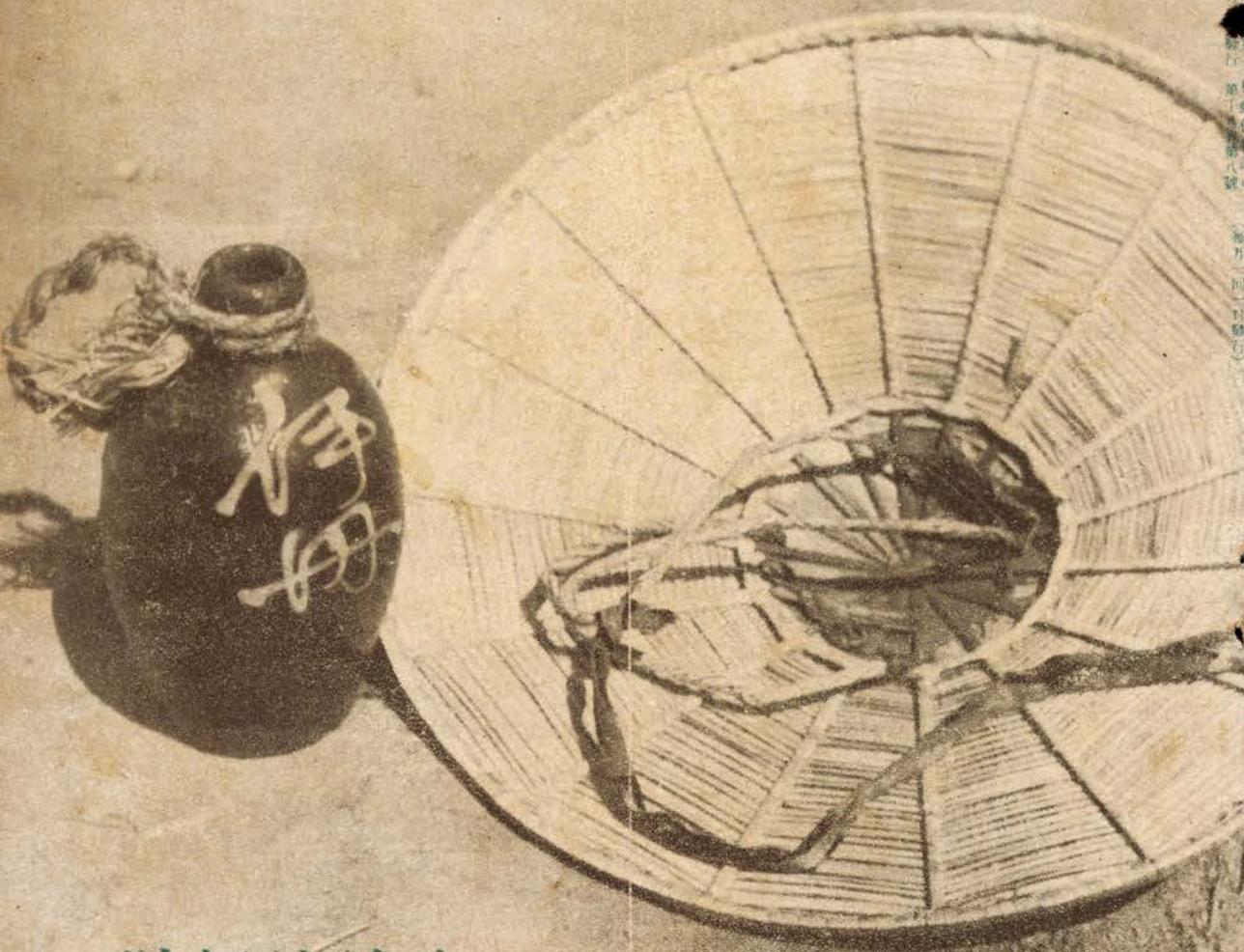


麻生路郎主

# 川柳の証



昭和十六年八月  
 發行  
 第一  
 第八號  
 地方  
 第二  
 一頁

八月特輯號

Pensoj flugas trans la land-limon

ムツツイロペン



大阪 津井 商店

書きよい  
錆びにくい  
強い  
廉價

新製パンフレット  
御申越次第進呈

麻生路郎 著

新川柳評釋

★定價 八十錢(送料六錢) 六條外証交は送料官費加算を乞ふ 振替大阪三〇三九二番

堺市出島海岸通三丁一八二番地

發行所 不朽洞

アサヒビール

大日本麦酒株式会社

含有滋味が  
もたらす  
元氣

愛飲家に  
確認さる

時代の要求する

絹服地 ★ ス・フ生地 ★ 毛織物

事務服・ワイシャツ

国旗・風呂敷 其の他

日東サービス株式會社

大阪市東區北濱二丁目 ★ 電話北濱②六六三六番 (4)



「文盲部落を訪ふ」を讀む

麻生路郎

工藤甲吉氏が「みちのく」七月號に發表した「文盲部落を訪ふ」の一文は句と文による報告的なものではあるが色々意味から興深く讀んだ。

一讀すると句による報告書といふ感じが強い。近ごろ面白く試みであると思つた。無學文盲を詠んだ句が三十一句、血族結婚を詠んだ句が十六句、計五十七句を發表されてゐるが極く無難作に、記録寫眞的な作句振りで全體を通じて詩情に乏しいのは甚だ遺憾である。

その部落はアイヌが掘つたといふ湯壺もある極く原始的な温泉地であり、淺瀬石川の土流から山中へ徒歩で約一時間を要するところにある。戸数が僅に七戸、先祖は源氏の落人であるとかで、部落の人たちは何れも無學文盲ではあるが世塵を離れてゐるだけに、その性質は純朴なものださうである。

次にそれ等の句を二三紹介して見やう。無學文盲へ配つて讀んで郵便夫無學文盲封切らぬまゝ、二、

想隨 井戸堀

小山文三

従つて文盲部落といふのは偶然の機會から訪ねた筆者田中甲吉氏が驚いて假稱されたもので、その部落の名でないことは云ふまでもない。

凡三十五年の昔、さる田舎で製糸會社が創立されて、威

容八絃に輝かさんとその縁起を祝つて製糸株式會社と命名

三日無學文盲新聞なんてどんなもの

★

文盲部落だけど旗立つ奉公日、文盲部落里まで下りて金に替へ

折角の好題材を捉えてゐながら、心理的に深く掘り下げてないで笠附式表現で、樂々と詠んでゐられるのはホントに惜しいと思ふ。

句そのものは作者自身も未完成のものだと云はれてゐるさうであり再度この地を訪問される意思もあるとの事故この次には嚴肅な態度で作句された藝術的な作品を見せて欲しいと思ふ。

次に、山奥の部落の情景を彷彿させてゐる

文盲部落蒼々と昏れランブ

文盲部落七つ草家花が咲き

の二句を掲げて作者に敬意を表したい。

したのであつた。

所謂田舎の物持ち連の仕事と謂ふものは其初めは相當の信用もあるし、これを取巻く連中も中々威勢がよいので、忽ち羽振り利かすものであるが、其れが永續きはしないのが常例である。

製糸も型の如く其の初めは大變な勢であつたが、日露戦後の不況が祟つて、忽ち兩代金のキツイ催促を喰ふやら、重役諸公の責任支辨やらで僅か二三年後には、倉庫も建物も工場も機械も敷地も失せ去つて残つたのは潰すにも金がかつて潰し切れない處の井戸と土堀だけになつてしまつたのであつた。

家柄を誇つた田舎の物持ちが貧乏して、家屋敷も無くなつて終ふ事を、此地方では井戸堀になつたと云ふのである。

製糸會社もつまり「井戸堀」の諷りを免れなかつたのは氣の毒であつた。

之れを聞いたさる飄飄な男の曰ク

①ナンて 仰其名の縁起が 惡いや ②ヤルヤル ③に通ずるから ④ヤルヤル ⑤に

川柳雜誌 八月號目次

表紙(笠と徳利) 岩崎柳路

「文盲部落を訪ふ」を讀む 麻生路郎(一)

牛疊漫實話 森牛疊(六)

柳世界史(六) 戸田孤峰(三)

旅の手紙 高鷲亞鈍(三)

武玉川四篇研究(二一) 梅本屋山(四)

詩泉一掬 道廣世紀彦(七)

吟行地 奈良篤(六) 麻生路郎(二)

街に住めば 高橋かほる(八)

御祈禱 小畑自由朗(五)

理想隨筆 小山文三(一)

狸の習性について 富田壽久(四)

狸のことはなし 石曾根民郎(四)

狸のことはなし 林佐市(五)

狸のことはなし 前田五健(六)

狸のことはなし 森東魚(七)

狸雜筆 其一 狸でない狸(森牛疊) 狸過ぎ(酒井ヒトケ) 狸成り(岩崎柳路) 分福茶室(藤田山)

狸雜筆 其二 或る秋の夜(岩崎柳路) 狸A・B・C・D・E(小畑自由朗)

狸雜筆 其三 狸と狐の脚比べ(藤田夕鐘) 狸への小徑(大森風來子)

狸の句 九ぬきは化かす(長野文庫)

近作 柳柳塔 麻生路郎選(六)

舟柳近 麻生路郎選(八)

一路集雷古本 森東魚選(天)

各地柳 高橋かほる選(天)

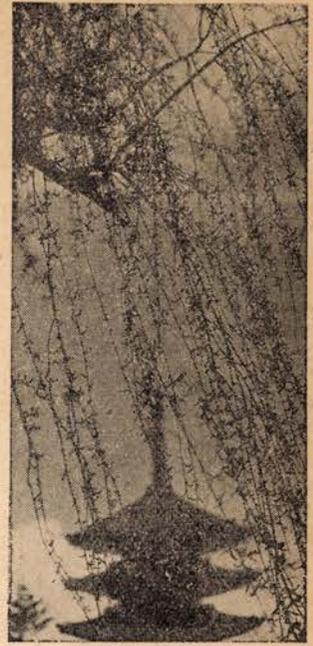
川柳協 濱田久米雄選(七)

社關係の人々(三)

後柳展望(五)

記(五)

興福寺五重の塔



# 吟行地 調べ 奈良篇 (六)

麻生路郎

## (28) 萬葉植物園

★萬葉植物園は馬止橋の東北にある。

★この植物園は大坂朝日新聞社が昭和二年の春、天平文化宣揚運動を起したのが機縁となつて生れたもので、廣さは約三千坪、東西百五間南北三十六間の長方形をなしてゐる。萬葉集編纂時代に近い平城平安の造園手法を参酌して設計されてゐる。

★園の中央の池の島にある老木はイチキガシで、池は約六百坪、水禽を遊ばせ、池尻には小さいながらも丹塗の橋がある。

★この池を中心に、萬葉植

★萬葉植物園は三月一日から十一月末日までは毎日午前七時開園、午後五時閉園、十二月・一月・二月中は午前八時開園、午後四時閉園されてゐる。

★左に植栽されてゐる植物を掲げて見やう。名も聞いたことのない植物が澤山あるのに驚かれるであらう。何れも歌に詠まれてゐるので驚きは更に大きい。

アカネ・アサ・アサガホ・アシ・アシツキ・アセミ(又はアセビ)・アヂサキ・アツサ・アハ・アフチ・アフヒ・アベダチバナ・アヤメグサ・アラナ・イチシ・イチヒ・イネ・イハイヅラ・ウキクサ・ウケラ・ウノハナ・ウハギ・ウバラ(又はウマラ)・ウメ・ウモ・ウリ・エ・オホキグサ・オミノキ・オモヒグサ・カキツバタ・カシ・カシハ・ガタカゴ・カヅノキ・カヅラ・カニハ・カハヤナギ(又はカワヤギ)・カヘ・カヘルデ・カホバナ(又はカホガバナ)・カラアキ・カラダチ・キビ(又はキミ)・キリ・ククミラ・クズ・クソカヅラ・クハ・クレナキ・クリ・コケ・コノテカシハ・コモ・サカキ・サキクサ・サクラ・ササ・サナカヅラ(又はサネカヅラ)・サハアララギ・シキミ・シダクサ・シヌ・シバ・シヒ・シラカシ・シリクサ・スギ・スゲ・ス

スキ・スズ・スミレ・スモモ・セリ・タク・タケ(茸類)・タケ(竹)・タチバナ・タデ・タハミヅラ・タマバハキ・チガヤ・チサ・チチ・ツガ(又はトガ)・ツキ・ツキクサ・ツキヌチノカヅラ・ツギネ・ツゲ・ツタ・ツチハリ・ツツジ・ツヅラ・ツバキ・ツボスミレ・ツママ・ツミ・ツロヅラ・ナギ・ナシ・ナツメ・ナデシコ・ナノリソ・ナハノリ・ナヨタケ・ナラ・ニギメ・ニコグサ・ヌナハ・ヌバタマ・ネツコグサ・ネブ・ハギ・ハジ・ハチス・ハナカヅミ・ハナダチバナ・ハネズ・ハハ・ハハソ・ハマユフ・ハリ・ヒ・ヒエ・ヒカゲ・ヒサギ・ヒシ・ヒメユリ・ヒル・フヂ・フヂバカマ・ホホガシハ・ホヨ・マツ・マメ・マユミ・ミクサ・ミル・ムギ・ムグラ・ムラサキ・ムロノキ・メモ・モモ・モモヨグサ・モムニレ・ヤナギ・ヤマズゲ・ヤマダチバナ・ヤマタツ・ヤマチサ・ヤマブキ・ヤマキ・ユヅルハ・ユフバナ・ユリ・ヨモギ・ワカメ・ワスレグサ・ワラビ・エダ・ヲギ・ヲミナヘシ

さつさと松くぐりゆく下戸の禮  
大木になつてもどこか柳なり  
梅の大關難波津と筑紫湯薪ほど乳母の里から桃の花春寒し山の蔭もふところ手泊つたが可惜さくらのとがになり  
まんまるく嫁菜の殘る犬の糞  
駆けぬけて芝に寝てゐる野掛道  
夏の野はまだかむるなり女切花  
かきつばた二録ほどは水を切り  
卵の花の雲に干鯛の値がさがり  
燃えたつたやうに柘榴の花は咲き  
夕顔は大工のたてぬ家に咲き  
あやめ川鱈汁とは出来心朝顔のつるを引き切る仲たがひ  
歌に詠む若も果ては炭俵尻に手を組んで見まはす稻の花  
小刀を持ちづめにして栗を食ひ  
等々のうちで、よくこなれてゐる句もあれば、拙い句もあるが例句として並べて見た。  
★現代作家も又、植物を詠んだ句は尠ない。たとへあつても、萬葉植物園にある植物

よりもダリヤとかチューリツ  
プの如き洋種のものが比較的  
多く詠まれてゐる。

海岸の松は逃げ出す姿な

しげる

笠竹の先まで垂れる柳の

馬行

車窓から見る一軒家梅が

空壺

咲き

ちよぼちよぼちよぼ

ちよぼちよぼと咲く女郎花

いが栗を提げた男が遠慮

せず

悠紀田へ勿體なくも雀下

はれる

柴も絞りも咲いて眼やに

とれ

詰譯で芒の中を歸省する

雅幽

萩の花昨日の嵐思はせる

開路

眞ツ直ぐに立つ氣の竹に

洗面子

風があり

沐天

夕櫻とんぼがへりがして

路耶

見たし

(29) 興福寺

★昔の興福寺の境内は四町  
四方もあつた。昌泰の頃でも  
猶堂塔雑舎が百七十五宇もあ  
つたといふことである。附屬  
境内まで入れると東西が二十  
七町、南北が七、八丁もあつ  
た。

★興福寺は藤原氏の氏寺で

大津の京に、中臣鎌足の夫人

であつた鏡女王が山城の山

科に建てた山階寺に創まり、

その子の不比等の手で飛鳥の

京に移されて既坂寺となり、

更に平城筑都に際し三度遷つ

て今の處に興福寺として現は

れたのである。その後、藤原

氏の勢威の伸展と共に官寺の

班に列して寺運大いに振ひ、

南都七大寺の随一となつて徳

川期に及んだが享保二年の大

火で伽藍の大部を焼失して昔

日の壯觀を失つたのである。

最もそれ以前に興福寺は炎上

の厄に度々見舞はれたのであ

るが藤原氏の背景があつたので

災後間もなく再建落慶し舊觀

に復してゐたのである。

★興福寺を詠んだ句。

興福寺ああ焼けぶとりせ

ずじまひ

興福寺湯殿を閉めた鍵も

さび

没落は興福寺へも響くな

り

見てくれといふは礎石の

興福寺

生者必滅なるほどといふ

興福寺

同

同

同

同

同

同

同

同

同

(30) 五重の塔

★興福寺の五重の塔は奈良

の花形中の一つである。塔婆

の建立は光明皇后の御願に基

いて天平二年の造立で、當時

皇后自ら御手に簀を持つて土

を運びたまひ、供奉の女官が

皆これに倣つて奉仕したと傳

へられてゐる。その後、數回

火災に罹り應

永三十三年に

再興されたの

が現存のもの

である。

★特にこの

塔を川柳に詠

むことは難し

い。

石段の下で

見た塔又見

上げ

奈良の春か

くれんぼう

も塔の蔭

路耶

遊覽記念五

重の塔がバ

ツクなり

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

(31) 薪能

★足利時代から徳川明代に  
かけて興福寺の南大門の芝生  
で、二月七日から一七日間演  
する能樂を薪能又は芝の能と

云つた。興福寺では平安朝か

ら修二會と云つて一七日間晝

夜の行法を修して國家泰平を

祈る行事が恰度、嚴寒のこと

であるから、堂外に薪を焚い

て暖を取り、同時に行者のた

めに湯を沸すこととした。と

して興行し、第三日からは一

座は春日若宮の法樂の能を勤

め、残りの三座交代すること

四日、最終日には又四座連合

の興行をなしたのである。後

豊臣氏の時一度中絶したが、

徳川二代將軍の時、薪能料米

三百石の寄進をうけて再興し

江戸から金春、寶生、金剛、

毎年二座づつ南都に来て勤め

たが、維新後は久しく廢たれ

てゐたが現在では又復興して

ゐる。

★この薪能を詠んだ古川柳

では

鹿の糞よけて地謡かしこま

り

薪の御能飛火野の近所也

能を見る鹿ぼんとしたつら

がまへ

灰だらけになつて奈良の能

を見る

神代から消えずに續く薪能

なまくらをさして薪の能を

見る

薪の能は鉢の木と知つた風

などがある。この外にも澤山

あるが、優れた句は見當らな

い。(つゞく)



蓮の園物植葉萬

川雜投句用箋  
一册十五錢・送料三錢  
切手代用可



カウツの扇面寫眞は前田五健先生筆の狸（鈴屋主幹所蔵）

複雑怪奇なる現下世界狀勢に際し、吾々日本人の使命は益々重大であります。狸はその飄逸の中に餘裕を忘れず、國民理念の妙諦を禪でゆく、愛すべき東洋固有の動物です。その警若たる狸肚こそ吾々が學ばねばならない大神の象徴であります。此の際に當り今回の「狸特輯號」こそ最も意義深きものであると信じます。各位の御好意を深謝します。（編輯局）

# 狸窟話

狸通 富田 壽久

狸と八の字は深縁不可分の狸縁であります。

狸親爺と嘘八百のことは暫らく預りまして器物、繪畫となつた酒買狸も只飄輕愛すべしとのみ簡單に片付けるわけにはいきません。

そも／＼經本三十六禽形曼荼羅西方第八に狸座を有して御存じの八疊敷きの外かに、先づ其のブラ提げてゐる徳利の印しが必ず丸の中に八の字であります。吾が四國路には講談田邊南龍師の釋く松山騷

動の八百八狸は有名で、先年お狸列車として豫讃線大井驛狂騒曲を奏して今日の科學する時代に一躍靈驗をビツクニニスされたお袖狸は八股のお榎さんの名にて高く、又源平の合戦を鳴物入りで障子に寫し見せると云ふ讃岐の八島寺の八毛狸は法名を小八大明神と稱し、又狸器狸像の有名陶工には道八、狸八、豆八、八八亭あり、名曲長唄の「たぬき」を得意とする名匠の名が仙八老等々の如く、そこで八の字意は數字の中で最も勢ひの強い字であること。十は滿つるで缺くの憂ひ、九は苦に通じ、八の威勢のいゝところでは手八丁口八丁、八ツ當りに八八鳴る、よく飛んだ義經は八艘をとび、寄せ手の大軍は必ず八千餘騎、武運の神は八幡社、八咫鳥は肇國日本を照らし、八紘一字は日本道など此のハツラツとハチキレさうな八の字の優勢と且つは末廣がりの延喜を多分に持たせて狸の七變八化、轉身自在を諷し其の動的の盛氣を思慮

飄逸な狸器狸像こそ人生哲學の妙諦を教へてゐるのであります。これを最も輕妙に諷示してゐるのが例の徳利の印しで即ち動の八を丸で包んだ、これ即ち狸、狸即ちこれ人生訓と云ふことに相成るのであります。勿論生マ狸は保證の限りではありませんが破れ笠を冠つて最低の生活に馴れ、通帳を

## 狸のことなど

石曾根民郎

提げて貯蓄を懲慚し、好むところの酒徳利は倦むことを知らぬ無限の氣力を藏し常に不平不満を云はず、世事不關焉の圓轉洒脱な恰好の中にもべん／＼たる鼓腹の度量と餘裕を持つてゐるところあたり殊に狸は東亞特産の動物であるだけに將さに非常時下の日本精神の表徴であると狸窟も通る次第であります。

正保二年の「毛吹草」に狸寝入、寶永三年の「和漢古語」に狸寝入、鼠の空死と謂へる如く、狸はさも寝入つた風にしてゐるが、その癖どうして真から寝入るではなく、他へのカモフラージュに怠りないのである。狡智姦猾な狐と比すれば寔に滑稽な姿態で、微苦笑を禁じ得ないが、獵人などはこの狸寝入に油断して取遁すことがあるそうである。山で狸を追ひかけて、ドンと一發射つとコロリと見事に引ツクり返つた時や、犬が追ひついで一噛みしたと思ふとグタリと參る時に限つて隙を窺ひ取遁す。撃つて來た狸を土間に置いて飯を食つてゐると、戸の外の犬が頻りに吠立てるので、格子の間から覗いて見たら、死んでゐる筈の狸が頭を持上げる。そこでエヘンと一ツ咳拂ひをすると、あわてゝ又グタリとしてしまふ。そして暫く經つてあたりが靜かになると、狸がそつと細目を開けて様子を窺つてゐる。エヘンと又一つやると、あわてゝ眼を閉いでしまつたといふ。狸の背中を半分剥ぎかけた時急に何か用事が出來て狸をそ

こへ置いたま、隣の部屋へ行つた。するとその狸が、背中を半分剥がれたまゝで、ノソノソ這つて背戸口から外へ逃げ出さうとするのを、折よく家内の者が来て捉へたことがあつたそうである。(大正十五年刊「猪・狐・狸」)

狸寝入りが私たちの俚諺として通用せられるほどに斯くの如く真に迫つたものなのである。Fox Sleep はこれは狸寝入りと譯してゐるところを見ると、日本のみでなく人間に對する自己擁護の狐狸はとつづくにも住まはせる性情を育てゝきたゆとりがあつた筈である。

### 狸ねいり

初會の客、うれぬ珊瑚珠をみる様に蒲團の上にとゞとひとりまでどくらせど女郎は來ず、あまり退屈して、小便に行き歸りみれば、女郎來て居て「コハまたおやすみなせんかえ」といふ。客、行燈のわきに立ちながら、目をねぶり「こう〜」

天明年中刊「うぐひす笛」

これは江戸小咄である。行燈のわきに立ちながら目をねぶり「う〜」と寝息をかいだところが要點で、この小咄の味のあるところである。狸ねいりといふ題に目をやると一層この小咄の掬すべき諧謔がにじみ出てくることに思ひ

合せられたい。江戸小咄はその意を強ひるところに勘所はないのである。所謂如才のない、打てば響くこゝろの琴線に觸れ得て、人心の機微にうなづかなければならない。

みす紙で狸の顔をかたづけ、ち 化けて來た狐狸を起すなり 起きなんしなど、狸へより かきり 狐をば化かして歸る古狸 長尻と狸寝入りの根くらへ

古川柳では標客の句が自ら多いは致しかたもないところ、そういふ界限に於てこそ狸寝入りの措辭と姿様と情理とが映し合ひ、こよなくもその寮圍氣が生きてゐるのであ

つた。

### 〇

五代將軍徳川綱吉の治世、千代田の城の奥表を、殆どわが家の如くに振舞つてゐた護持院の大僧正隆光が、寒い時分の登城に好きな料理を所望せよといはれて、狸汁を頂戴したいと答へた。生類憐愍の趣旨から殺生禁斷の殿中で、しかも出家の身として、狸汁を所望せられたので、幕府の料理役人はいたく困惑してゐると「何、少しも苦しくない。茹て叩いてつみ切つて、鍋へ入れて汁にすればそれで結構」といはれて、また一層驚愕してしまつたといふ話がある。料理役人が狸汁の調理法

の知識がなかつたといふのではなく、狸汁のもうひとつの意味に透徹してゐなかつたわけだ。蒟蒻を入れた卵の花汁を狸汁と呼んでゐる地方が今でもあるが、殿中などでは巷間に傳はる狸汁の意味を輕んじておつたと見てよからう。日本五大噺のひとつのかち山（な）なかで、おばあさまを騙した狸は素知らぬ振りでおばあさまに化け、うま〜おちいさまに喰はせ、逃げ際に「ば〜あ汁喰つた、ば〜あ汁喰つた」と得意氣に叫んでおちいさまをがつかりさせる説話があるけれど、こゝでいふ狸汁は狸を煮た料理を意味してゐたのだ。(つづく)

## 狸の習性を語る

大阪動物園長

### 林 佐 市

狸はその習性として奥山に住まず、人家の近い山里に棲息し、晝間は穴中に居り、夜間食物を漁りに往行するためと、その姿態の飄逸味と、如何にも一くせ有りげな、化かしそうな面構から、人間が勝手に化かすと決めてしまつたものでせ

う。狸こそ迷惑な話です。狸と違つて狐は害敵が襲ふて來た場合、一種の強烈なガス(體臭)を放射し、敵のひるむ隙に逃げますが、狸にはそんな隠し鱗はありません。狸寝入りとよく言ひますが、これは狸が眼を開けて

寝るからでせう。月夜の晩に腹鼓をうつとか、〇〇八疊敷の話など何からそんなことを言はれるやうになつたのかね。また酒などは吞めません、人間が狸を愛するあまり、人格化してしまつたのでせう。狸の種類は六種あり、大體東洋固有の動物で、日本では樺太(一種)、北海道(一種別名エゾタヌキ)、本州、四國、九州(一種)、朝鮮(一種別名カウライダヌキ)、ア

ムール地方(一種)、中華、滿洲(一種)で、これ等が世界各地に分布してゐるので、白狸といふのは普通の狸のアルビノ(白色變種)なのです。ムヂナ(貉)は世間では狸と別のものだと思つてゐますが、狸のことです。一見狸と似たものに狸が居ます。これは毛質が粗剛で前肢の爪が長いから區別でききます。別名ではマミダヌキ、ササグマ、マミとも言はれてゐます。狸の棲息場

所は多く岩下や、樹の株、土堤、崖などに住み自ら廢家、古寺などに住み自ら穴を穿つことは餘りなく他の動物の空家などに這入り込むといふ無精者。借家住ひといふわけですな。食物は野鼠、小鳥、蛇、蛙、小魚、昆蟲、蚯蚓、陸貝、其他野菜類で、獸類中最も雜食性を持つてゐます。壽命は十年から十五年位で分婉は一度に四、五匹位のものです。(談)



# 吞まれの遍路

◇…落語・田能久後日譚

## 前田五健

まへがき

落語の「田能久」は真正正銘の人間を蟒が「狸」と間違へ人間なら吞むが狸なら蟒の面目として吞まぬ、今後仲よくして狸の化け方を教へる、その約束に再會の折、お互に好き嫌ひを知つて置くのが便宜だから、先づ嫌ひのものを聞かしてくれ、「田能久」は金が何より怖ろしい、金の爲めには命もとられると答へる。蟒は柿澁と煙草のヤニが大禁物だ。こんな話をして田能久は命からがら脱して峠を下り、フト里人に洩した一言から蟒は總巻狩をされ、タバコの脂汗で散々に、やられて逃げるその無念ばらしが或夜田能久の宅へ「貴様が、秘密をバラした故、俺は、エライ目にあ

つた、鬨討だツ貴様にも一番怖ろしいと吐いた物をやるぞツ」ドサリと投げ込んだ一萬兩…以上が「田能久」の筋である。私の話はこゝから始まる。

さて蟒に一萬兩の黄金を投込まれた田能村久兵衛の田能久、根が正直者のことゝて、蟒を欺したのが氣になつて、たまたらず、孝行を充分につくした母親も早や三年前に此世を去り、あとは子寶も出来た夫婦三人、財産はドシ／＼殖える一方、田能久長者、狸長者と世間から、モテはやされるだけ、蟒に對する濟まない心…：假りにも萬物の靈長たる人間が、蟒を欺して長者に成り、又た人と狸と間違へられて、狸へも又た相すまぬ、

こんな憤みが、モテ囃やされる度に大きな心の重壓であつた。

「なあ、おきん、わしは斯うやつて何不足なく暮らして居るのも、元はと云へば、あの素人芝居の道樂から、伊豫の宇和島へ出かけ母者の手紙で歸る途中、鳥坂峠の頂上で、出會つた、人を吞む蟒…：」

「その話なら何度も聞いて知つて居ますが御恩のある「うはゞみ」様ならこそ、邸内へ小さい乍らも祠を建て、宇和波美大明神と朝夕、拜んでおるのでは、ないかエ」

「サ、左様云つて終つては話が出來ぬ、まあお聞き…：あの時「田能久」と云つたのを狸と聞き違へられ、狸なら化けて見ろの、絶対絶命、幸ひ持つて居た娘と大百で狸になりすまし、危い命は助かつたものゝ、あまりの怖ろしさにその麓でお百姓連へ、ツイ口を、スベラしたのが大變な事に成り、蟒様は大災難の大怪我なされる、腹立ちまぎれに俺が云つた、世の中に金より怖いものはないの金を一萬兩、思ひ知つたかと投げ込まれ、さて如何したものかど氣も顛倒、代官様へお届け申せば、何アに親孝行の徳で天か

らお授けの金だ、又た伊豫の國、鳥坂峠の諸人難儀の蟒を追放した手柄も大したもの、構はぬかまわぬ、貰つて置ける有難いお裁き…：あゝ勿體ないこれも日頃信心する神佛様や、御先祖様のお蔭さまだと思ひ、その年から引續いて四國遍路業へ心ばかりの、お接待…：世間からは「狸せつたい」だの「うはゞみ供養」だのと有難がられ、これでイ、のか、こんな事で濟むのかとあの怪我をして門口へ現はれた蟒様が目先にチラツいて、俺の心はどうにも納まらん…：そこで、つく／＼考へたのだが、おきんツ」

「ほんとうに考へれば考ふ程相すまぬ勿體ない事ばかり、お遍路になつて八十八ヶ所を巡り、若しお目にかゝれたらお禮とお詫びは、おまえさんの云ふ通り、充分にして…：萬一きかれないで吞まれたら…：」

「それも定命、本望じやないか」  
こんな話があつてから田能久夫婦は子供を親戚にあづけ迷故三界域 悟故十方空 本來無東西 何所有南北の笠を冠り杉の木杖も軽く四國遍路の旅に發つた。  
阿波から土佐も打ち納め、札所札所や其附近で「うはゞみ」様の噂を聞いて見るが、尻尾程の手が／＼りもなく、伊豫の國の四十番札所觀自在寺も後ろに、昔なつかしい宇和

Sata Special Klinik

呼吸器病科

診療 呼吸器科

佐多愛彦 加藤謙一

螺良四郎

内科

入西辻北所習寺町中島堂市市

院醫多佐

四八二八北電 町北島堂坂大

島へ足を入れ、旅役者時代の思ひ出も、なつかしく、法華津峠も念入りに、訊ね、捜し鳥坂峠の命拾ひの杣小屋も、そこか、こゝかと、尋ねたがあと形もなく、松の雫、杉の風、たゞいたづらに夫婦は重い足を引きづり乍ら、四十五番札所伊豫の國上浮穴郡の山に在る海岸山岩屋寺へ辿り着いた。

# しなは狸

北 京  
森 東 魚

「狸は、ない」だが捕まへた話を先づ一つ。それは私の友人の武勇談？なのである。彼が宇治川水力の工事に働いて居た時分の事で一夜かなり現場から遅くなつて引揚げて来た處、折柄の雨と暗さに懼みつつも、通りなれた土橋にさし掛つてふと足元を照らす懐中電燈をバツとつけたのである。其處に折悪しくも不運な一疋の小狸が居たのだ。彼は不意の光に驚き居すくんでチツと橋の途中に蹠つてしまつたのだ。「私も驚いたが、ヤツ

も餘程驚いたのでせう、お蔭で洋傘を一本滅茶にしちまいましたよ」と友人は哄笑した。タヌ公は懐中電燈下に友人の洋傘の亂打を蒙つてノビてしまつたのは申すまでもない。

× 私の長男が小學生の時、學藝會で文福茶釜の狸を演出した事がある。狸の縫ひぐるみを簡単に製作する爲に私と家内は午前二時頃迄掛つた、デザインは私がした、家内は焦茶色や白の布を買ひに走つたりした、頭が中々六ヶ敷かつた、私の鼠色の古中折の鉢を之に充てたり、耳をつけたたり鼻の筋に墨をつけたり私も段々面白くなつて一生懸命に作つた。千大根みた様な尻尾に家内もキヤツ／＼笑つたりして縫つて居た。「全く親馬鹿ぢやありませんか」私達二人は出来上つた縫ぐるみの前で茶を啜つた。之は中々好評で中央公會堂まで出陣帳をやつたんだから凄まじい。お蔭で長男は當分、狸と云ふ綽名を

本堂前も夕間暮の故か人影もなく、シーンとした境内に夫婦の鈴は寂しく又た尊くも流れる……  
「だい、じやうの、いのる力の岩屋寺、石の中にも極樂ぞある」  
御詠歌は澄みきつて、あたりの岩清水も、しばしは止まるかと思はれる程であつた。  
「阿波から土佐、伊豫の國と

搜したが、何所にも、噂さのカゲラも無い、あゝ困つた事だノウ」  
「伊豫の國も半分程はお詣りした、残るは讃岐の國一つ、早うお目にかゝりたいもので御座りますな」  
「こゝの御本尊は不動明王様よく拜んでお願ひ申さう、岩ばかりで出来たキツイお山、こんな高い所に海岸山と云ふ

のは、弘法様が御修行中、雲やら霧の、ありさまを、海にたどへて、  
「山高き谷の朝霧海に似て、松ふく風を波にたとへむ」  
とおよみなされた故ださうなこんな話をして居ると、ソレわしがよく語る阿波淨るりの壺坂を思ひ出されるわい……さあ、此邊で宿をお願ひ申しませう」  
宿屋と云つても農と杣と片

手間の、へんろ宿、屋根から笈水がおちて来る様な宿へ泊ることになつた。  
食事すすみ、缺けた火鉢を中の五、六人の輪へ、田能久夫婦も仲間入りして、寝るにはまだ早い宵の口の、他の人々の旅話やら信心話、宿の主の鬼に荒される畑の話も、すんで一寸シーンとした頃ほひに夫婦は例の「うはばみ様」の話を物語つた。(つゞく)

× 先頃異名を集めた本を一寸見たら狸の項に「不來」とあつた。由つて来る處は分らないが、史記封禪書注とあるから調べたら分らう。

× 私は俵に此の號をつけてやる事にした。  
「餘程な狸疊へ半身すり」と云ふ夜叉郎の句がある。狸殿入をしてゐる奴が本當らしく布團から乗り出して半身疊へ落ちてゐると云ふ

× 馬琴の作に、「たぬきのきぬた」と倒さに讀んでも同じ題名があつたと記憶してゐる。



意注御に蚊ヤリラマ

## 鬼の構圖

歐米のデヴルとかデモンといふ鬼は大が角が一本しかありませんが、日本の鬼

は角が二本あつて虎の皮の犢鼻褌をしめて居ります。これは本邦畫壇の雄、狩野派の宗祖古法眼元信の考案ださうで、俗に東北隅(丑寅)の方を鬼門と稱え迷信家らの恐れるところから、鬼の表現法を鬼門に結びつけて頭に二本の角を配し、腰から下を虎の皮の犢鼻褌にして牛虎を象るなど、ちよつびり頭のよいところを窺かせました。後世鬼を更に強いものにするため、

手足を龍の爪にしたなどはブチ壊してあります。いよゝ蚊の季節となりましたが、蚊の仲間では鬼よりも恐れられる雞のマークの金鳥蚊とり線香を不斷に使へば、夏中蚊の心配なく涼味が満喫できて全く鬼に鐵棒です。殊に近年大陸との交通が頻繁に成つて、マリリヤで怖ろしいアノフェレス蚊も相當内地へ入り込んでゐますから、今年は餘程御注意は肝要と言はねばなりません。(廣告)

# 塔柳川



—選郎路—

「開けゴマ」と云ひたいジブラルタルである  
 腰掛は瀬戸か伊萬里か藤の下  
 蓼そへて一層涼しい鮎の皿  
 標 麻生 葭乃

大阪へ着いたら捨てるつゝじかな  
 卑下すればする程男見下げられ  
 食慾の不平等も我ばし  
 鐵屑はあるぞと指をさし  
 出迎ひを頼むと田舎から歸り  
 大阪 橋本 綠雨

靴磨き二十分程留守をする  
 錆掛屋と輪替屋主婦が二人待ち  
 プールではやはり男の子がわるさ  
 劍道の稽古屋上からの聲  
 大阪 高橋 かほる

路郎先生上京 (三句)

横濱 福田山雨樓

颯爽と朝のブラットを無帽です  
 江戸川の昔もくはし師の頭  
 日本を叱つた著者の黒眼鏡  
 飛車が成り角が乗り出す獨ソ戦  
 ホルモンの缺乏そんな年かいな

片岡監察官勇退

だしぬけにやめて惜しがられるばかり  
 無帽主義偶々冠つて忘れる  
 忘れた帽子を追っかけて半日

兵庫縣 奥村丹路

汐の匂ひも海から戻る女達  
 三十路すぎて勿忘草の名に惹かれ  
 添ひとげて地味なおなごになりました  
 たそがれの家庭圖西瓜をまつぶたつ  
 誰もゐないから爪を嚙んでゐる  
 國おもふひとゞき夕陽なほおちず

張家口 岩崎柳路

大阪へ七年振りに歸りて

電車にも優先権と云ふ座席  
 ビヤ樽の置場も狭し法善寺  
 出直してもう一袋買ひに行き  
 空瓶を提げてマダムはバスに揺れ  
 PCLいきなりロッパ唄になり

拜屋 寺井鏡々

猫を飼ひ母娘が無智な暮し振り  
 街路樹茂りノーストツキング氾濫す  
 子子の動いてるのも生活サ

ハワイ 高澤一浪

JOAK此所は布哇の片田舎  
 腕組みの二人に舗道譲らない  
 ちつぽけのナイフも夜の力なり  
 肌の色違ひサラリまで違ひ  
 時勢とは言へど持たざる方強し  
 上役の假病と知つても見舞ひ  
 休閑地箸より重い鉄を知り

大阪 戸田孤篁

親馬鹿チャンリン將基に負けた話する  
 馬政史に競馬悲劇は書いてなし

神經を抜けば地獄のおもしろさ  
銅鐵や銅や地獄にある資源  
じやが芋配給一かゝへ持つ御りよんさん  
踊り喰ひふと地獄繪を思ひ出す  
かへりみち螢女の肩へくる

兵庫縣川西町 戸倉普天

女事務嫁ぐ日近く針を持ち  
モウ用はないとソ聯へ宣戦し  
地圖書いて貰つて來たが新開地

ホノルル 古川風竹

ハワイの燈管(僅か十分間) 三句

燈管のお布令たてよこ五ヶ國語  
「敵爆機」流れた星の座のあたり  
燈管が夏の二人に短か過ぎ

日系兵俺を反身で歩かせる  
蠣船に波あり軍需工場見ゆ  
兵庫縣 水谷鮎美

三女道子出生(六月二十七日)

おちつけ〜兒の話からまづはじめ  
厄歳の兒もたのもしや似て産れ

森山嘉道氏に感謝

對座してまるき膝なる名づけ親

★

大津 鈴木石鹿

満四歳泣いて脅かす術を覚え  
義齒してそれから後妻さがす也  
深編笠俺の笑ひがわかるかい

一周忌庭ぼろ〜と成り果てぬ  
善處する約を残して榮轉し

聖戰下「イヴン」の馬鹿になりきれず  
兄さんと敬し妓は身を衛る

大津地方豪雨禍

天帝はそれ中庸を避け給ひ

末妹長男出生(六月末日)

二太郎よ君の御楯となれよかし

松山 渡邊曉重

金の事にふれないうちに斷はられ  
炎熱へ玉子つめたき影を持ち

食ひはづしなきをたのみて騎虎の勇

今治 月原宵明

サラリーのこれではいかぬ養兎の書  
紫陽花が田植の留守へ濡れてゐる

タイヤーへ蟹の威嚇は無駄だつた  
原告だ被告だどちらも持つてゐる

トラツクの故障へ雪の峰伸びる

夜釣

一條で海の神祕に觸れんとす

大牟田 高田抱逸

生活へツバメも雨をいとはない  
生字引惜しくも停年制にふれ

女工だから社でもモンペで我慢する

獨ッ戦

實力で來いと戰車をぶつつける

大阪 北山悟郎

へだて無き信と愛とに頭下ぐ  
梅雨晴れを待ちわびて居しボートの灯

徳島縣穴吹町 姫田夕鐘

親日文豪モラエスの十三回忌に寄す

著書すでに日本人として認められ  
無口とむくち怒つてるのかと思ひ

鮎ひとつ提げてしよんぼり戻つて來  
水一荷はづかしながら擔げない

奉天 吉田水車

カフエーの隣フォルマリンの臭ひ  
帯皮の穴あけ足して淋しけれ  
ほんとうに書く慰問文手がふるひ

大坂 後藤 青兒

かけまくも畏し朝の霧深し  
臍くりを慰問袋にするけなげ  
休閑地此所も大日本の土  
戦功を聞けば白衣は目を閉ぢる

大坂府柏原町 宮岡 白峯

蚊の聲も大きく夏の日も暮れん  
◎へ女としての慾を出し  
大臣の聲も疊の上で聞き  
戦争の話家主に聞かしとき

松本 石曾根民郎

山近しわが身のうへを守るとと  
蚊帳の月ありくとして子をのぞく  
若者の放言を俟つ青疊  
さゝやかに土葬を畢へて喜雨届く

合 唱

君が代へ飯炊く煙のゆとり見し

大坂 正本 水客

どつちみちよくは云はないのは承知  
七月の樓の雨と瀬の音と

華中理髮店(新國劇)

短髪器ニツボン人になると云ふ

宮本武蔵(新國劇)

梅林大夫は影をひいてゆく

豊中 黒川 紫香

下駄提げて戻る兒少し涙ぐみ  
鳩時計あくびの中へ鳴りはじめ  
土砂降りを見上げる中に犬もゐる  
二階借西瓜を一つ届けられ

大坂 丸尾 潮花

ヤアーさんと呼ぶ人もなく落ちぶれる  
教室の窓からとどくザクロの實  
賑やかにスタイルブック圍みに來

繼母連れて舞妓おはなで來る棧敷  
繪のように舞妓は宵の座にはべり  
慾のない顔で寝てゐる乞食の子  
嬢はんが嫁ぎ女中も暇が出る  
泳げない父も誘うて夏休み

大坂 岩橋 双虎

純喫茶店主この頃夜勤なり  
制服を同情される暑さなり  
魚市場みんな損するやうに云ひ  
引け刻も一緒お風呂も亦一緒

神戸 岡田 某人

ざら／＼の心で酒を悔ゆひと日  
六月初旬プールの水のをとどめ  
夏雲の猛きにしばし目をとどめ  
たびびとが擦ればマツチのなほ赤く

尼崎 酒井 斗風

そば粉かくたのしみ青い空を見る  
捺印と勤務手帳がいらぬ日  
子飼ひ社員の卑窟さを知る朝  
女工さんの惱み子供があつたのか  
職場から釣る人を見る畫さがり  
配給の米へ子供も口を出し  
四十に近い樂書金の事

大坂 北川 春巢

憂鬱は映畫でなほる程度にて  
高架下の家へ國から頼つて來  
週報で讀んだ話題で見合ひする  
逼塞の玄關に過ぎた靴すべり  
髪の濃さばかりを赤子ほめられる

下關 櫻川 不水

一廻りして熊蜂の歸還せし  
纖細な指がいとしい團扇張  
タイピストピアノを叩く指でなし

失敬な蛙液體かけて逃げ  
くちなは踏んで鼻緒ぶつり

廣島 濱田久米雄

汽車辨へ田植が八分通りすみ  
貰ひ手がある娘お針の手をやめず  
見舞状私の方も妻が病み  
買つて来る筈であつたは子の記憶

大阪 菊澤小松園

実績があつて無口が提げて来る  
親の名で訪へば通れる應接間  
凡人の一人となつて呆けてやろ  
おまへんと顔も見せず断はられ  
化け様も矢つ張り狸親ゆづり  
人間に化けた狸は肩がこり

大阪 魚住満潮

雨雲がうごいて淋し一人旅  
府廳から出て来た彼に髭が有り  
酔ふ程の酒も廻はらず夏祭  
螢籠ビールの息をかけられる  
君ヶ代を歌ふ心になり給へ  
末の子も兄の武運を祈る顔  
厘毛を争ふ臆恐しや

二合三勺サラサラと米の音  
モンペいで来た嫁さんへ都の灯  
闇取引若き検事は火の如し  
ブルとプロ地球はのせて廻はるなり  
喰ふために弾く三味線となりけり  
圍はれて岐阜提灯の下に座し

八月二十日母の日

いゝ時に死んで呉れたと母憶ふ

大阪 清水史路

鼠の目病人の目とぶつつかり  
初茄子を手にし閑地へ有難う

汪主席訪日(三句)

手向草けふは元首でありませぬ  
君が代のあとから汪さん近衛さん  
いまごろ判りましたと女房ほざいたり  
褒めやうと思ふ男が辭めて行き  
遠い火事きけば宵からもえてゐる  
玄關に鉄あり笑つて頭搔き

大阪 中内翠芳

ラツシユアワー荷物に詰め込まれ  
三毛猫と並んで伸びた非番なり  
時局反映夜店だんく廣くなり  
お尋ねに答へず電車迂り出し  
折一つ提げてアパルト訪ねて来

下關 多田市多樓

思惑のあるお愛想にカドが立ち  
病床へ音もかすかに青簾  
女手に銃後の牛の従順な

徳島縣日和佐町

濱田賢次

敵討邪魔する國へ向きなほり  
口笛へ配給の無い犬が来る  
一輪を隅に裁縫餘念なし

ドイツ

廣島 大森風來子

またニキロ瘦せてアツパツパ一のしわ  
この女馬鹿かと思ふ借り電話  
靴磨に見上げられわれ目を伏せる  
日本の進路號外など要らん

大阪 玉井彩泡

支那料理額はタワ一のいゝ月夜  
歩いてるだけの家鴨をおかしがる  
氣の毒なこと辯解どもりにて  
旅の宿今ごろ愛染かつらかけ  
アルバムへ無口の人が世辭を云ひ

賣切申候古きのれんを持て餘し  
いさかひし眼もよう似たるあねいもと

岡山 鈴木九坡

轉業の或る日を驚馬にさも似たり  
辛辣な手紙爲替が入れてあり  
忠孝と習へばすぐに壁へかく

岡山 逸見灯竿

何も彼も休暇へ延ばし晝寝する  
回覧板の手垢俺のもあるの也

生ビール胃袋へ今届きけり  
黄昏の庭にぶらんと静止する  
静まつた校庭へ下駄腹を見せ  
歛の柄の丸さを知つた休閑地

下關 國弘半休

野球から職場を生かすヒントを得  
手榴彈野球の様に投げかへす  
場内の何處へ分室造らうか

大阪 道廣世紀彦

一本のビールに足りて初夏の街  
眞紅眼に痛い眞晝の鉢葵

身嗜みだけは忘れず貧に處し  
忘れても忘れても人人であれ

姫路 岩崎水虹

集金の男の帽子あみだなり  
鹽豆で南進論を闘はせ

子が出来てからの銀座は晝通り  
簡單な便りが母の氣に入らず  
城下町一茶の軸といふを掛け

立読みを追ひ拂ふ氣の水を撒き  
満ち足りし女のくらし髪を梳く

山口縣小郡町 岩崎勇記

型通りお經がすんで酒肴  
満員車妻はあそこに子はこゝに  
寝たらしい團扇ボトリと落ちた音

盛装を笑ひたくなる日の暗さ  
窓の隙女がものを思ふとこ  
海の青さ空の大きさ小舟は揺れてゐる

大阪 阿萬万响

燭ともす母愚痴もなく慾もなく  
作業服耶蘇を信じて疑はず  
驢馬啼いてゐるなりいくさ無い日なり  
生きるすべただ雑草の如き民  
母に先づいくさの傷の物語

尼崎 小林文月

現金の客を車掌は先に切り  
ゆづられた席に夫を掛けさせる  
巡禮も今は時々バスに乗り  
輕蔑をして居る人に金を借り  
朝と晩ベタルを踏んで子を育て  
病人も自分の番と氣付くなり  
いつ洗ふのかアパート物を干し

伊丹 酒井美知夫

噴水がほしいと思ふ風呂上り  
こころべこころべこころべ芝生へ陽があたり  
又今日も食べすぎたのか金魚の死

大阪 小川恒明

押入の中で子供は寝て居たり  
託兒所をのぞいて歸る晝休

大阪 浪玲之介

のけ者を守衛夫婦にいたはられ  
役人は巡業と言ふ代りかたは  
御主人にはばかり扇風機は忙し

大阪 夷一笑

螢狩踊の師匠つれて来る  
たそがれの窓へ母子のシルエツト  
桐の葉の暗に誰やら立つてゐる  
夾竹桃れんぐわ小路の中で咲き



# 柳川世界史 (VI)

戸田孤篷

## (五) 周の興亡

釣れますかなぞ、釣られに  
来た文王を釣上げた太公望が  
先ずフツトライトを浴びる。  
釣れるまでよう辛抱しなかつ  
た女房に三下り半を投げつけ  
られて、覆水盆に返らずとシ  
ツペ返しをする。堯舜夏殷周  
と理想國家の代名詞の止めに  
なるだけの事のあつたのは最  
初の程。笑はぬ美姫褒似に笑  
うてもらう爲めインチキの烽  
火ばかり燃いて天下の信用を  
なくした幽王の後は下剋上の

足利の天下同様。あくまで臣  
節を説いて武王の討紂を諫め  
苦節の通らぬを嘆いて山中に  
餓死した伯夷叔齊兄弟の名は  
日本人に記憶されていゝ。  
女房は出世と添つてゐたの  
です  
太公望叱らずに聞く臣の道  
獲り切つてあしたの藤だけ  
のこり  
日本學伯夷叔齊論にふれ  
支那人の不幸は堯舜忘れ兼  
ね  
幽王へくすぐり様も教へに  
來  
また烽火燻人形も寄つて來  
ず

## 春秋時代

魯衛晉鄭曹蔡燕齊陳楚秦吳  
越が周室への尊王を口にしな  
がら銘々の勢力争ひをした。  
管鮑の交りが杜甫の詩貧交行  
となり齊をして最初の覇業を  
完遂せしめる。宋の襄公の愚  
直が宋襄の仁と云ふ熟語を作  
つたのもこの時代。一番見も  
のが呉越の仕合。薪に臥した  
のが呉の夫差で膽を嘗めたの  
が越の勾踐。結局傾國の美人  
西施が呉王をしやぶり殺して  
しまふ。戦ひの爲めの戦ひは  
勝つた方もやがて亡びて呉越  
仲良く三途の川を渡る。

本心は周王ダシにつかはれ  
る  
管仲は貧乏線の事にふれ  
宋襄の仁を笑へぬ人間さ  
中原に模範仕合をする呉越  
神經衰弱時々薪をよけてね  
る  
傾國の秘策も、一度與へ云ひ  
美しいスパイに夫差はねら  
はれる  
西施ふと夫差の情に迷ひか  
け

## 戦國時代

の。齊の大將田單は義仲に火  
牛の手本を残す。角に松明を  
つけたのが日本で尻尾に蘆茅  
を燃しつけたのが支那。天下  
の諸侯は競つて食客を養ふ。  
有名な孟嘗君はワンワンコケ  
ツコーの選手、猫八の御先祖  
みたいな連中を引具してゐた  
ので危く秦の虎口を脱れる。  
かと思ふと風は蕭々として易  
水寒しとうそぶいて人殺しに  
おもむく稼業人もその内に多  
敷交つてゐた。  
中原の鹿懸賞てねはれる  
王の王はね錢貯めてゐる噂  
牛車日本にあり支那にあ  
り  
影武者も物真似遣ひも連れ  
て發ち  
易水の話は刺客法なんだ

## 聖賢と百家

熱帶國の思想は衣食から獨  
立して絶対の慈悲を考へるが  
働かねば食へぬ連中の住む温  
帯では愛にも中庸が取入れら  
れる。孔子様の仁はこの代表  
的なるもの。性善説の孟子は  
放伐を肯定して唯物的になり  
性惡説の荀子は天真爛漫など  
知らず、自然現象から道徳を  
獨立さして科學的社會觀を立  
て、無抵抗主義の老子はのた  
れ死に、逍遙遊をものした莊  
子は仙人になれとすゝめる。  
諸子百家に至つては黒子の兼  
愛説、楊子の個人主義、孫子  
呉子の兵法、商映、韓非子の  
法家など賑かだ。後になる程  
人間共をきつくしめつける。  
これらは春秋戰國の亂世を理  
解して始めて得心がゆく。  
俗臭の残り老子喫きつけ  
る  
人間の愛を仁とは申すなり  
いけにへへ聖人として眼を  
つむり  
第一夫人とにかく父母の側  
におく  
ほど／＼の所で孔子様の仁  
百邊も孟子の母はいとはな  
い  
測隱の心と別にとるしらみ  
唯物の匂ひも孟子少し出し  
己の欲する所に従へば自滅  
いがんだの様に善をばひつ  
ける  
進歩とは不幸を殖す合言葉  
さからはず暮せば妻も子も  
逃げる  
殺されるとこまで御無理ご  
もつとも  
逍遙遊の哀れは捕へられ  
世話ずきは趣味だと揚子き  
かされる  
國民にみな百姓をさすつも  
り

# 武玉川四編研究 (三二)

梅 本 塵 山  
森 東 魚  
蛭 子 省 二

(512) おもひに瘦て酔を断て居

省二 深く心に思ひ煩ふ事があつて、酔断ちをしたといふのである。

東魚 酔をのめばやせるといふ位だから、都合のよい断物をしたわけである。

塵山 茶断、鹽断、酒断は有るけれども、酔断は聞いた事が無い。

省二 私も初耳である。普通は茶断鹽断火の物断ちなどいふ。酔断は字引にもなからう。

(513) 大きなものにわたくし松明

東魚 大男に松明を持たせるのであらう。されば明るさも効果が多い。

塵山 興味薄い句である。  
省二 大男は先登に立つ場合が多い。

(514) 長崎で死ぬ江戸の嘘付

東魚 江戸を知らぬ長崎の人々に何でも江戸の事は知りぬいたやうに出鱈目をいふ男が死んだと云ふので江戸と長崎は今歐米へ行く位な気がする程、遠い處と思つた時代、嘘も

バレずに死んだと云ふ心持ちにユーモアがあると思ふ。

塵山 江戸の敵を長崎で討つ、といふ俗語もある。

省二 武玉川十五ヘンには、「江戸でなくなる長崎のうそ」。

(515) 中て無く成樓の人

東魚 樓の欄に倚つて景色をみてるた数人が居つたが、ふと何時の間にか中の一人が見えなくなつた場合であらうか。

塵山 興味索然。  
省二 「中て」に何にか意味を持たせてゐるかに思はれるが。

(516) あふむも鳥に戻る草臥

省二 喋べり續けた鸚鵡も草臥れて、鳥に戻つて黙つてしまふ。「鳥に戻る」は巧妙。

東魚 人語を眞似なくなつた處を鳥に戻つたとやつたのは機智である

塵山 作者の大いに技巧を弄した句であるが、「鳥に戻る」は面白い。

(517) 女房にした五本めの指

省二 鳳凰の指切りで、小指を切つた程の女だから、身請して女房に。  
東魚 小指を切らしたその女を、遂に女房にした。  
塵山 賛成。

(518) 憎い若衆を撃つ小鼓

省二 衆道關係句。憎い思ひはするが可愛さが残つて譽める。

東魚 憎いと云つても失戀したのであらうから、本當はまた可愛く思つて居るので、其堪能な小鼓には、今更思ひをます心持ちか。

塵山 若衆に鼓を配した句は、鮮なからず有るやうに思ふ。

(519) 買物もそれ程ツ、の貞か來

東魚 安いものは、それだけの身分の低いものが來、高いものは、それだけ立派な人が來る。又茶や人參大根を買ひにくる人物と、色紙短冊を買はうと云ふ人物とは、自ら顔付も違ふ次第である。

塵山 鐵砲見世には、三尺帯の客が來る。

省二 内容は平凡であるが、「それ程つゝ」といふ言葉は面白い。

(520) 留守居の嘘の届く九重

東魚 勅使三度に及ぶ、其三度ではないか。

塵山 前説の如くであるかも知れぬ。  
省二 判らぬ。

(521) 鷺をたましこかして子規

東魚 子規は鷺の巢へ卵を生んで知ん顔で鷺に卵をかへさせると云ふそれであらう。

塵山 鷺のかひこの中の子規で、少し古臭い。

省二 類詠はいくらもある。ありふれて居る。「鷺のまま子かにさる時鳥」(重頼)。「鷺に他生の縁か時鳥」(重久)。

(522) こんにやく賣の足を見て買

省二 菊蕪を造る時は足で踏む。だから、菊蕪賣の足が汚れたなかつたり、踵物などが出来てあたりしては買ふ氣にならぬ。——こんな事は世間話の中によく出る。

東魚 前説通り。作り過ぎのやうだが、諸詠味はある。

塵山 妙齡の美人が踏んだならば菊蕪屋の繁昌疑ひ無し。

(523) 三味線に追返さるゝ松の風

省二 松の風と三味線の合奏、住吉的な風趣なのか。それとも妻妾關係か。

東魚 松の風は琴で、お妾の勢が強く、奥方は偶々出府しても、直に國へ追ひ返されるとの意と思ふ。

塵山 此の句は川柳臭味が多いと思ふ。

(524) 前の任持を樹造りか引

省二 前任職は庭好みで、植木趣味が深かつたと庭師いふ。(樹造りとあるが木造の意なれば普請好きとなる)。

東魚 庭師であらう。

塵山 樹の字を使用してあるから庭師と思はれる。

(525) 天の川瓜茄子にまた足ハなし

省二 天の川は七月七日、孟蘭盆會は七月十四日から、後者には瓜の馬、茄子の牛が精霊棚に供へられる前者の折りには未だ四ツ足はない。東魚 前説賛。奇抜な云ひ方が面白い。

塵山 秋の句の生命は坐五に有る

(526) 衣くにタア寝かさぬ蚤か飛

省二 此蚤なか／＼やり手だ。後朝風景を想像させられる。

東魚 蚤に寝かさなかつたやうでは、さぞ足音斗り聞いて居たのだらう。

塵山 古川柳研究の初期には、句中の「タア」を「ゆふあ」と読み、これは何であるかと不審を立てた先生が有つた。

(527) 悟氣を見出す十月の禰宜

東魚 神の留守に社殿の掃除やら境内の手入れなどするうちオヤ／＼と思ふ處に呪の藁人形でも発見したのではないか。

塵山 貴船の社が聯想されて、平

凡ならぬ句である。

省二 十月の禰宜の句は多いが、見つけどころだ。

(528) 杜若見に行むす子化する也

東魚 未考。

塵山 息子が化かされるのではない歟。杜若が疑問である。

省二 杜若見を口實にして、シケ込むのではないか。(三圍稻荷などに杜若はあつた)。

(529) 牛のあふない鵲のはし

東魚 牽牛星が織女を牛の背にのせて天の川を越すが、鵲の橋では如何にも荷にまけて、毀れてしまひさうだと云ふ意であらう。

塵山 木曾の棧道よりも危く、面白い句と思ふ。

省二 烏鵲翼をならべて橋とするのだから。

(530) 因果ふくめて見せ馬の字

東魚 賣に出す馬に、かくなる成行を云ひきかせ、飼主がすそをつかつてやるので情味がある句と思ふ。甲はすそ馬盥で脚を洗つてやるのである。

塵山 征馬を戦地へ送るにも、斯る情景がみられるであらう。

魚二 馬市に行く場合だ、此句の如き始末のある事は、東北地方の新聞記事で常に讀ませられる。(見せ馬)といふ言葉を、今も尙ほ東北地

方の馬市で用ひて居り、「引き馬」とも云ふ。せり場へ出して、せり賣する馬を「せり馬」或は「おせり馬」と云ふ)。

(531) 浪人の心て廻る法輪寺

省二 嵯峨渡月橋の南に在る。十三詣で有名だ。春は花、秋は紅葉で杖を曳く人多し。謡曲の「放下僧」にも、西は法輪嵯峨の御寺廻らば廻れとある。「浪人の心」とは、氣輕な騷人氣分になり得てである。

東魚 束縛される事なき心持ちであらう。

塵山 法輪寺でなくとも宜からう北山あたりの方が適切ではない歟。

(532) 女の耳に足らぬ神託

省二 神のお告が、ホンの一ト口なので、女には不足なのである。東魚 簡單なのでもの足りぬのであらう。

塵山 湯立の巫女の神託で、あれは至極簡單なものである。

(533) 我影をろくに覺ぬ植木賣

省二 植木を上げた釣臺を前後に擔ぐ、(高價品は御膳籠に入れた)、だから自分の影がよく見えぬといふのか。早朝家を出るためもあらう。

東魚 暮方から夜市などへ出るの、日のあるうち出る事が稀だから斯くいふたのであらう。

塵山 昔は植木賣の夜市は無かつたものと思ふ。不可解の句である。

(534) 無筆の女房持て極樂

省二 讀み書きの出来ぬ女房なら欺ましよ。

東魚 變な手紙も一向氣がつかぬ。

塵山 讀まぬ同士書かぬ同士の、似たもの夫婦で家内安全。

武玉川編研究正誤表(二一〇號)

(頁) (段) (行) (誤) (正)  
十二 二 九 幸禮 福

大阪 松前 松前屋

本舖 松前

出張店 朝日ビル 専門大店

常陸中(四四六番) 八二〇番

# 樽柳作近

## 選郎路



唯産んで居れば鶏それでよし和歌山 秋月宏方  
 赤鬼青鬼地獄の色もちと派手な  
 下手な字と思へど筆は逆はず  
 一世紀生きて聴診器も知らず  
 降り續く雨統制の世と知らず  
 火の姿鬘と揺れ尾と揺れる松山 山本耕一路  
 凶事の匂ひ「あぶないきしやにちゆい」  
 春光が顔に纏り手に絡み  
 引き廻す綾なる帯か鯉の列  
 雪霽れて象牙細工の如き樹々  
 米食の時間へアース匂ふなり大阪 有馬千斗  
 國債と嫁を抱合せて貰ひ  
 辭退しきれず獻金すると言ふ  
 ビル街を陽除眼鏡のスパイめき  
 妾宅の今宵常會あると言ふ  
 製材の音ひびき來る晝寢覺め姫路 小川靜觀堂  
 縣境霧が冷たい汽車の窓  
 へんな事をきくがもと藝者かね  
 同

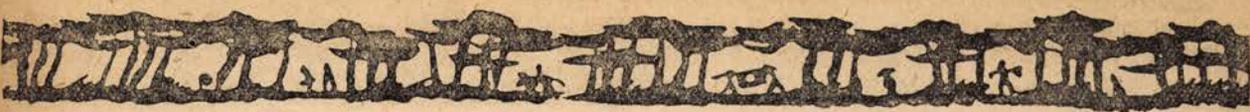
少うしは横着なのがよい男  
 往來へ繪をかくように孫はなり大阪 保田呆人  
 後添ひの好みの浴衣一寸荒らし  
 これは〜ルンペン犬を飼うてゐる  
 生きてます鯛の頭をはつて見せ  
 初戀は河鹿なんぞを聞いてゐる大阪 津路紅多呂  
 此の村に過ぎたる人が歸る日の  
 名藥を海の歸りに教へられ  
 水盤へふれて軍刀床へ置き  
 取るやうな物ない家を娘は案じ和味 長谷川 岬  
 靴買ふも考へる目に高級車  
 微笑めば氣のあるやうに喰ひ違ひ  
 備かつて寝るとは見えぬ夜の町  
 地下鐵で待つ事にする共稼名古屋 松井靜子  
 約束へ雨の支度で汽車に乗り  
 簞入のカメラへ笑ふ父と母  
 いさかひの贖だけはとうに詫びて  
 縁談は寄せぬかまへの看護服神戸 平川久枝  
 同

### 半疊漫實話

森 半 疊



五月廿一日 (この日は私の満  
 廿年の結婚記念日即御婚式の日で  
 す)の夕刊大阪に食満南北先生が  
 川柳で一本やられた笑話運動記事  
 と共に「半疊の疊をつくれ」と題し  
 て夏季大掃除が近づくにつれこの  
 半疊の効能が説いてあることから  
 昨年の夏季大掃除の折、吹田の丹  
 波斗士氏の宅に「疊一疊紛れ込み  
 いたさすや」との廻し文が、近く  
 の森龍生氏から來たのが、近くに  
 住人で名まで發音が似て居り號に  
 は倍の一疊とてつきり拙者半疊  
 のしれわざと路郎さん腹乃さんた  
 ちの微苦笑話題となつて何も知ら  
 ぬ拙者を驚かされたことを思出し  
 て獨り微苦笑を禁じ得ない。吹田  
 の留守宅の四疊半の居間は、半疊  
 は中央に陣取つてあるが冬になると  
 と其半疊は簾や網戸などと共に納  
 戸部屋に格納されてそのあとに腰  
 かけ式の簡便な爐が設けられる。疊  
 は机、食卓、麻雀臺、刺繍臺等に  
 なるが今年の冬は北支生活の關係  
 でそのなつかしい半疊にも爐にも  
 永久の別れを告げることになる。



毒藥を量れど死とは遠くをり 同  
 通じあふ想ひ二人のたゞ歩き 同  
 大阪辯女一人の氣の強さ 同  
 買溜めでない慰問品嵩をみせ 中高山武士  
 またしても時局を餘所に派手な柄 同  
 せめてもの愁木製の冷蔵庫 同  
 目に青葉「琵琶湖哀歌」を聴いてゐる 同 山生子洋子  
 松葉杖顔に憂苦のかけもなし 同  
 或人へ  
 真心はとゞくものだと信じしに 同  
 卒業をした娘都會に義兄がある 大坂吉川琴聲  
 月曜の話昨日の釣のこと 同  
 信心の母の足には驚いた 同  
 新兵器沙漠の駱駝驚かせ 布施岩本晴美  
 蔭膳に酢蛸の匂ふ夏祭 同  
 畫家或る日モデルの理想聞く若さ 同  
 道しるく夏の姿の撒水車 東京森本秋子  
 縁談の話へ梅雨の窓を開け 同  
 東京も夢の捨場にこまるとこ 同  
 僕達の廣場に茄子の花が咲き 大坂富岡巨人  
 金と閑あれば僕でも肥えますよ 同  
 空闲地へ女中は馴れた鋏を持ち 同  
 簡単にラムネが出来る子の科學 愛媛縣大洲町 米澤曉明  
 氷屋も子持夜更を起きてくれ 同  
 泣聲の中で小兒科儲けて居 同  
 咳をしいく獨り寝るなり 廣島縣竹原町 西野みづほ

床屋から夏の頭となつて出る 同  
 本人も癒す氣醫者も救ける氣 同  
 皇軍にすまぬ氣がする湯がこぼれ 同 桂 松籟  
 頼山陽の生地、竹原町を噂しつゝ西條につく  
 山陽の生地みおろし汽車はゆく 同  
 大學生がなに事ですと叱られる 同  
 休閑地畫報の通鋏を入れ 和歌山和歌太 米田春童  
 美くしい夕焼へ鋏洗ろて去に 同  
 入院半歳あゝネクタイを結びたい 同  
 病む母と病む身で銃後まもるなり 大坂山本葉光  
 弟子も征き親方も征き雨がもり 同  
 空闲地銃後の土もいそがしい 同  
 蚊柱を切り切り縮るてつかぶと 徳島縣鳴島町 矢田壽澄  
 釘だけとりあとは雑巾 同  
 磊落に見せるこゝろの悲しかり 同  
 此の町の老舗と言ふも轉業し 愛媛縣角野町 在間小樓  
 藤椅子へ働いて來た息をする 同  
 大陸へ嫁く日が近い田植笠 同  
 波布の居た道も久しい墓参り 名古屋八幡勿來  
 慰問文窓で河鹿が鳴いてます 同  
 軍事便母へは別に來るのなり 同  
 閑地利用知事の島は撮られてる 朝鮮松田幸士  
 祝結婚(二句)  
 新婚は兄も邪魔もの遠く坐す 同  
 新婚へ兵もニコ／＼席ゆづる 同  
 人の世にうつむき勝ちな男にて 廣島大山露斗

五月十四日 天津に出かけた序を以て初めて天津川柳會に出席した、寄せ書のはがきを眺めながら會の主筆天津郎氏曰く「天「半疊はどなたですか」僕「僕です」天「昔有名な森半疊といふのが居ましたかね」僕「え、つ、あまり有名でもなかつたですよ」と會話を交はしたものの、その所謂有名であつたらしい昔の森半疊もあらば遺入りたき心地した天津郎氏は大正末期から昭和初期にかけて滿洲で氣焔をあげて居た半疊を思出されたのであらう、昔といはれる程の老半疊が眞逆青年の顔をしてあらはれやうとは思はれまいし此奴有名？な半疊を知らず名乗つてやがると思はれたとであらう。

詩・泉・一・掬

道廣世紀彦

詩の中から眞の詩を見出すことは、人間の中から眞の人間を見出すことよりも至難である。

自己の人格にヴェールを被せたやうな作品には、眞の美と價値を有しない。藝術作品の眞の美と價値は須らく、生地のままの人格と個性を表現したものに在る。

詩人は、常に時代の先驅者でな

混合酒へも胃袋はなれて 同  
 胃袋は代用食のヂヤガイもだ 同  
 戀と云ふ文字には遠きねき烟 京都馬場理公  
 吾れながらうまい洒落風呂にゐる 同  
 牧場の匂ひの横の戀だつた 同  
 人なんか見てゐず金魚涼しそう 大阪竹部香林坊  
 爽竹桃ちらほら汗をかき初め 同  
 留守宅はつゝまじやかに撮される 同  
 センチメンタリズム手の指の細い 大阪上山よしみ  
 お茶漬けの夢を見たよと歸還兵 同  
 休閒地野球が出来ぬやうになり 同  
 西洋の寝巻着て寝る青畳 大阪榊岡詩朗  
 防諜の何んのお神よく喋べり 同  
 二刀流蟹の威赫に似た構へ 愛媛松前町 佐伯鶏域  
 バラソルをたゞめばパスは停るもの 同  
 先輩の前では出さぬ藝も持ち 廣島竹原町 杉原愛鳩  
 父のバリカンすかしたりおこつたり 同  
 洋食なら喰べられるわと云ふ悪阻 松山 沖原緑風  
 老嬢の本心意地も張りも無し 同  
 離京に際して(體動)  
 サヨウナラ國都の街の霧深し 大連 中村對州坊  
 今日も又日本へ船が行くそいな 同  
 事務所六階より埠頭を望む  
 高砂やすう／＼辯の嫁貰ふ 松江本庄快哉  
 手の節を鳴らし喫茶の隅にゐる 同

無事できへあればで驛を離れたり 大阪 浪花駒志希  
 空を見て地を見て今日を出ぬと決め 同  
 あの屋根の下なる生活ふと惧れ 岡山 本田ユリエ  
 梅雨の郵便受へ逆境の手紙来る 同  
 プレートは下駄が踏んでる辻野球 松江 吉岡笑々  
 學生の下駄は亂れてゐるでよし 同  
 哀れにも手術する兒と生れつき 大阪 松浦帆船  
 一列に並ぶを犬にながめられ 同  
 こそばゆく下駄を履いてる歸還兵 松江 梅本登美也  
 これは又以外女房の安來節 同  
 運命と他人あつさり片附ける 大阪 和久洞人  
 賣切れ賣切れそれが無くても濟んぞと 同  
 娘のひさに辨當箱と小説と 三重 中三輪丘堇  
 蠅などの来る場所で無し咲き亂れ 同  
 豚の様にきらいがなくて優良児 堺 野島神樂  
 國民服形はくづれて梅雨晴れる 同  
 鶯と二度ゲーブルですれちがひ 大阪 松永青雲  
 こう迄は濡れるとしらす梅雨の旅 同  
 今日からは時代の人だ赤禱 尼崎 江口正路  
 面倒な乗越きらすボーナナス日 同  
 地圖貼つてからは自分がヒットラー 松江 松崎專太郎  
 酒好きのむかしむかしを言ひたがり 同  
 踏切番の臆に赤い青いパラソル 岡山 岡眞理子  
 ふと来れば襪襟の乾く友の家 同  
 妻である事を言はない女事務 大阪 濱本みのる  
 肩書も無く獻金の記事となり 同

ければならぬ。創造へ創造へと精進して行つてこそ、眞の詩人の名を耻しめざるものである。

何事も自己内省に俟たざれば、効果を齎らすものではない。内省なき藝術品は玩弄物に均しいものである。



作詩は、現實の力であり、詩は人生に窮極の勝利を與へるものである。

詩を作る前に、自分が詩となつて躍れ。そして、意義があれば、詩として書き止めよ。

### 街に住めば

高橋かほる

家の前のポストが知らぬ間に美しく塗り替へられてあります。それが郵便物を入れる處も黄色で無く、前のやうに金の塗料で豪華版に仕上げたのであるので……世の中がのんびりして来たやうで嬉れおます。



蜻蛉取り一間戻つて下駄をはき 大阪 橋本美奈子

アツバーカトつ男の誇らしげな身振 同

鳥居からホツクをかけたいゝ姿 岐阜 藤井紫朗

遺児の緋の鳥居大きく九段坂 同

初産へ母は臍くり置いて行く 大阪 橋口松嵐

事故の現場に花が咲いてる 同

梅雨の窓啄木を想ひ一茶を想ひ 大阪 藤森小雅子

爪程の事に新聞記者が来る 同

損をしたひとと思へぬ美しさ 兵庫縣 木村染史

公定はキロと貫目で云うてやり 同

國債を買つて粗食の膳たのし 布施 小谷華素兒

ポスターの海は利久で渡れさう 同

古葉書さはさりながら女文字 兵庫縣 谷口寒草

米代のキャツシユ無情なものうち 同

戦友は又だきついて寝てしまひ 布施 上田翠光

兩親の白髪へ理想消えかける 同

農場奉仕(二句)

ソロバンとペンを持つ手で葱を引き 大阪 佐野牛歩

理論派が多く仕事がはかどらず 同

風呂までの留守ですラジオ鳴つて 大阪 宮田不二

同居から一戸になつた国旗立ち 同

張家口の相撲大會所見 同

米國援ソ聲明す 同

遠吠は藪蚊が喰つた程きかす 同

友訪へばまだ獨身と部屋で知る 大阪 平井流舟  
 働くに吝ならぬ服の纏 大牟田 村上十四之  
 一言の御禮へ苦勞ねぎらはれ 大阪 堀毛一龜  
 休閑地獄の持ち方から習ひ 大阪 後藤いくほ  
 まだちぎらんとこなすび三ツになる 兵庫縣 上沼芥舟  
 空びくへ夕雲赤く暮れを告げ 松江 中西南松  
 獨り者花瓶は空のまゝがよし 大阪 南 要兒  
 女だと見て曲藝の自轉車行く 松江 石原松江子  
 口答の出来るも親の居る間 鳥根縣 伊藤秀坊  
 僕の眼の中で日傘が廻つてる 大阪 面田競花  
 富士くたくオールへ寮歌流れて來 大阪 藤原うしほ  
 女教師をひとり残して稲光り 兵庫縣 花柳蘭子  
 制服のまゝで來てゐる女事務 大阪 堀 秋星  
 温情のかたぢけなくも卒の身へ 東京 北山 明  
 人間がからかつて居る心算猿のおり 神奈川  
 悪口か知らねど朝鮮語で言はれ 原相模 尾崎綠柳  
 今迄の不幸へ戦死する覺悟 大牟田 平島平人  
 戦死の父を偲んで 大牟田 園田初舟

去年なら海水浴にも父がゐた 大阪 朝田 章  
 バスを待つ一列ビルのかげに沿ひ 伊丹 岩井 泉  
 まんまるだ落書したい月が出る 大阪 關 みさを  
 金持のぼんち病氣で人となり 札幌 平野大太郎  
 遺子二人女の心みだすまい 大阪 中西彌生  
 美しい友と歩めば沈みがち 大阪 梶本則好  
 二へん目の寫真しなびた顔でとり 大阪 後藤柳風  
 コンクリートの石燈籠ある借家 京都 平岡年尾  
 對岸はもう日本でない灯がともし 神戸 湯淺小城子

健全漫畫雜誌

大阪パツク

月刊

價 二〇錢  
送 一錢  
全國ノ書店  
賣店ニアリ

發行所

輝文館

大阪市東區橫堀二  
振替大阪二六四番

狸雜筆 (其の一)

狸のヒトバケ

J T 生

播州西部赤穂郡の山間には「狐のナ、バケ人」とらぬ、狸のヒトバケ人をとる」といふ話がある。

狐は何にでも化けて人を憐すが進んで人を取つて食ふといふことはない。狸の化けるのは只「高坊主」の一つ藝にきまつてゐるが、人が驚ろいて坊主の顔を見上げて、氣を取られてゐると、不意に其のノドの下にかみついて、命をとるといふのである。ナ、バケは「七變化ヒトバケは「二化け」である。「高坊主」は關東地方などといふ「大入道」である。

狸でない狸

森 半疊

狸は僕の郷里鹿兒島縣では居ないと見えて傳説も噂も聞かない。従つてあまり興味も持たないが、最近食養道研究の副産物として人體、職業、動作に動物名のあるは心身不健康を示すことを知り蒐集したら約二百數十語に及んだが狸には狸(太鼓持)古狸、狐拘狸、狸寝入、同穴の狸、狸腹、狸尻陶器屋の卑稱)等がある。

狸憑き

酒井美知夫

狸の憑いた老年の女を有難いお



旅の手紙

—路郎師と共に—

高鷺 亞 鈍

Y・Aさま 六月九日 午後一時

今朝、七時に起床、九時頃先生と旅館を出て、電車道をぶら〜呉服町にきました。

これを左へ行けば川端筋の繁華街、右へとれば宮崎宮で、東公園や帝大があります。呉服町はそれ故、いはゞ目抜の場所なんです、ゴ、ストツプがなく、交通巡査が居りませんので、却つてうるたへました。ゴ、ストツプが無いの可笑しなもんだネと先生は笑はれる。二人は結局右へ曲つて、古本屋を見付けたのでひやかしてみました。

それから少し歩いて、市電に乗り、宮崎宮で下車しました。そも〜今度の先生の旅

行の目的もこの宮崎に尋ねる

先があつたからださうで、私用を果される間、先生と別れました。この邊で露天の大佛

さんを拜み、それから市電で少し戻つて東公園の龜山上皇

と日蓮さんの銅像を見て廻りました。再び市電で、川端町

で下車、所謂博多の心齋橋筋をぶらつきました。久しく飲

まなかつたコーヒの匂ひをこゝで少し嗅ぎ、晝過ぎ旅館へ戻りました。何れ先生も追

ツつけ戻つて来られませうし下關から市多樓、半休兩兄も迎へに來られる事と存じます

程、以上の通り、何れ又。

(博多比佐屋旅館)  
T・O様 六月九日 午前十一時

突然、思ひたつて路郎師と旅を重ねて居ります。こゝは博多の宮崎宮につゞく東公園

です。表の繪葉書にある日蓮さんの銅像には全く惚れとみました。そのマスクといひ、

ボーズといひ男の中の男といつた日本のヒロイズムです。立正安國を唱へ、ハツクと唐

土を睨んでゐる形相は實に物凄。餘り人も居らなかつたので、南無妙法蓮華經と一聲僕は唱へてみた。(東公園のベンチにて)

B・Oに 六月十日 午前一時 今日には實に暑かつた。やはり少しでも赤道に近づいてゐ

る加減ぢやないかと思ふ。關門海峡を一つ超えると、こゝはすつかり眞夏の衣裳であつた。僕が大阪を發つ頃、パナマ帽など冠つてゐる人は殆ど見當らなかつたのに、いまだは僕のヘナクチャになつたソフ帽が却つて田舎じみてゐる位である。おまけにアルパカの總裏の合服を無頓着に被てゐるのは、かほるがいみじくも言ひ當てたやうに、我ながら僕は大阪の在所もんだ。

昨日、博多の午前中は、先生の私用の爲、僕は一人で自由行動をとつた。修學旅行の途中、受持の教師の監督の目から免れたみたいな安易さである。このことは葎乃女史に内緒だが、柳町の日本一の妓樓、「市樂」の表門だけ拜んで來た。これはお前さんだけに洩すのだから他言無用なり相憎く大掃除に當つてゐて、晝間のことでもあり、色氣はさらに無かつたのはかへすがへすも残念である。和田三造の繪や、鏡の間など、拜觀できなかつたのは心残りであつた。名物の水だきも、晝は公定で二圓と五十錢で安いと思つたが、先生と一緒になければ意味ないので、うどんで濟

經や巻物で責め立てると、五升重に握り飯を一杯こしらへて呉れたらどくとの事故こしらへてやると重箱を背負ふて野原へ歩るいて行つてはつたり倒れた。後からつけて居た人がおこすと重箱の握り飯は空になつて居る、家へ歸つて來ると、どいた筈の狸が悪い、再び責め立て、又握り飯をこしらへる事三度、依然として狸はどかない。責め立てると狸は泣いて、どいてももう歸へる身體がない、この女に悪い魂のない狸がうる／＼してゐるところを獵師に射たれてしまつたから歸へる身體がないとの事、とう／＼その女は死んでしまつた。死んだ女の腹がなく狸が食べて仕舞うたとか狸の狸はどこへ行つたかは疑問。夕涼みによく聞かされる話。

### 肩唾もの

岩橋 双虎

阿波に生れて狸の傳説と一節の淨瑠璃も喰れぬ私は故郷を語る資格がない。それにしても廣い動物園を狸だけ見て來たのは私一人だけだつたに違ひない、今更ら感心するあたりさすが肩唾ものですね

### 分福茶釜

福田山雨樓

お伽話で有名な文福茶釜の遺跡といふのは方々に有るさうだが、本家は上州館林の茂林寺だと言ふことである。野生の又聞きした話

まし、午後一時ごろ旅館へ戻つた。三十分程遅れて、先生も所用を済ませられ暑い／＼と言つて歸つてこられた。聽て約東通りに下關から市多樓、半休兩君が迎へに見えた。市多樓君は細の着流し、半休君は白ズボンに白足袋に雪駄履きといつた恰好。小憩の後、それではと腰を上げる。熊本行四時四十七分發の列車で、大牟田驛に着いたのが夕刻の六時四十五分。改札口を出ると高田抱逸氏と覺しき顔の細長い人が直立不動の姿勢で立つてゐる。傍に半白の老紳士と、三十前後の頑丈な體格の溫和しさうな青年が、先生や市多樓氏が進んで行くと同時に頭を

（照多事記號前） 女人の部支關下雜川心園を師郎路



樓多市・川不・平呂九・鈍亞・笑獸・師郎路・記勇・子陽白列前より右は眞眞氏諸の休牛は内園・野くさるメツ・笑者・三米・亮介・路草・流瀬・方三列後

下げられた。ヤア始めまし、と例の如く先生の手輕な挨拶に、抱逸氏はたゞ無言でお辭儀をする。その瞳は感激にうるんで白く光るものさへ見えてゐた。未だ一度も先生

弟關係の緻やかさも、美しさもあつたのだ。

僕達は、そのまゝ歩いて驛の近くの會場である明治屋旅館に乗り込んだ。玄關が會場の受付になつてゐたりして、旅館全體が歓迎句會、會場といつた工合で吃驚りさせられた。二階に上ると、既に澤山の人達が句箋を握つてゐる。僕達は取敢へず別室に落着いて、夕餐をとる。間もなく先生始め吾々は會場の定めぬ席に着いた。向ひ合つて見渡したところ、若い逞ましい健康さうな青年達の集團である。それらの人達とカチ合ふ素朴な視線に、僕は大阪などで経験しなかつた、ある純粹なものを受け止めて嬉しくなつて來た。高田君の朴訥で軍隊的な挨拶もキビ／＼してゐて、圖らずこの句會で、盛んになつてゆく川柳新體制が感得されたのである。

路郎師は、選者の態度に就て、漫句に就ての訓話など、初心者にとつては聞きのがせない問題を四十分程、嚙んで含めるやうに講演された。型通り、半休、市多樓、亞鈍、路郎と披露があり、記念撮影をして一先づ解散した。半休君は明日の勤務の都合上、中

座されたので、後に、路郎、市多樓、亞鈍に、主催者側から、抱逸君と、今一人、重枝氏を加へて、ビールで乾杯した。さきに驛まで出迎へて下さつた老紳士とは、重枝氏のこと、氏は抱逸君とは同會社の右翼の方で、川柳及び抱逸君の爲に、同情と援助を惜しまないでゐられるさうであることを君にも一言紹介して置かう。

ところでビールに着に出た枇杷の話であるが、重枝氏が言はれるのに、大牟田ではビワとヒワの使ひ分けがあつて、ビワの小さい方はヒワであり大きい方をビワと言ふのだつてね。これは九州でも大牟田だけがこんな使ひわけをするらしいんだ。一寸面白い方言だと思ふので書きたして置く今日の便りは大變に長くなつた。亂筆を許せ。（大牟田明治屋旅館）

Y・Aさま 六月十日 午前二時

昨晚の句會は、高田抱逸氏の獻身的な御盡力で大變に盛會でした。下關の句會といひ昨晚の催といひ、何分疾風の如き先生の出現の爲、充分歓迎の準備も出来なかつたやうですが、それでも一日か半日の間で、あれだけの人達を集

は果してその寺であつたかどうかは確な記憶がないが、やはりその茶釜があつて、寺の曰くには、文福茶釜の文は、福を分けると言ふ意味から分福と書くのが本當だと言ふ事である。

## 芝衛門

夷 一笑

十年程前の秋、軽い神經衰弱で淡路の洲本に居た事があります。毎日三熊山に登つて芝衛門を祀つた前の茶店で溢茶と狸羊羹を食べて晴れた大阪灣を眺めながら小半日を過すのが私の日課でした。芝衛門の話は有名だから大阪の中座で芝居見物中殺された事も御存じでせう。

## 豆狸ものがたり

岡田 某人

雨がしよぼ／＼降る晩に豆狸が徳利持つて酒買ひに……行つたのですが、南無三、切符を持つて来てなかつた。

## 狸と兵隊

宮岡 白峯

兵力關係で假裝陣地構築に汗を流してから毎夜「シヤベル」の音を立て、歩哨の神經をとがらしたは勿論支那兵の假裝陣地への夜襲が毎夜繰返された。或る日の朝一匹の狸、身に數彈を受けて死んでゐた。日本軍を真似たので蔣介石に殺されたのだ。して見ると此狸、狸として置けないと假裝陣地

められ、會場を取定められた幹事の方々のお努力には、寧ろ涙ぐましいものがあります。市多樓氏は病氣療養中を押して奔走され、抱逸氏は時局柄多端な勤務先を半ば休まされて、會場の世話や、催物の印刷物まで全くの早手廻しは實に行き届いたものでした。

先生は、自分達の歓迎のために、勤務先を休んだり、餘分な経費はかけさしたくないと、行く場所／＼で御注意されてゐられますが、僕など先生に喰つついて歩いてゐるといふだけで、同じやうに歓迎して貰ふのは氣がひけます。市多樓さんが、病氣療養中の故をもつて、勤先を休んでゐるからと言つて、今日は別府まで送つて下さる事になりませう。話上手な市多樓さんと車中一緒であるのは愉しみです。昨晚半休さんは句會の終り頃、夜行で下關まで歸られました。たまの休みを先生に從いて大牟田まで送られ、その儘、夜行で歸り、ろく／＼眠られずにお氣の毒でなりませぬ。しかし斯のやうに先生を慕ふ人達の絶えぬ限りは、「川柳雜誌」はピクともしませんし、實に心強いものと僕

は思ひます。先生は最早軽い躬をしてゐられ、市多樓さんもさきまで枕を抱へて、僕と互ひに駄辯つてゐましたが、僕が便箋を引寄せたので、口をつぐまれ、やがて眠つて了はれました。僕も久しぶり睡眠を催しました。お休み。

（大牟田明治屋旅館）  
I・T 樓 六月十日 午後十一時  
わさ／＼別府までお見送り有難う御座いました。豊肥線の長い／＼五、六時間を、貴兄と共に居た事は、本當に退屈がしのげて助かりました。今やつと宿の温泉に浸り疲れを癒すことが出来ました。折角こゝまでいらつしたのですから、貴兄も下車すれば、よかつたのですが、奥さんが御心配なら仕方がないな。下關以來本當にお世話になりました。米三、半休、三方、草路勇記の方々には宜敷しく御傳言賜へ。貴兄といひ、抱逸といひ、熱血漢の双璧として、今更僕的印象に残ります。官吏には珍しい親分肌の貴兄に更めて仁義を呈す。（別府萬屋旅館）

H・T 樓 六月十日 午後十一時  
今朝十時前、大牟田發、途中熊本に立寄り一汽車遅れて別府に夕刻七時に着きまし

君が何を言ふか、松山では既に亞鈍が同行することも先刻承知の事だし、斷じてその様な勝手氣儘は許さんと厳しいお叱りを受け、一遍にへこまされ参り候。小生實は、全然未知な人達や、景色に見飽き、物憂い氣持になるのも結局旅馴れぬためかとも存ぜられ候。既に宿の温泉に二回入湯致せば疲勞も漸次恢復せし模様にて御座候へば、先生を誘ひ散策仕候處、とある土産店にて、小生の背丈に適つた手頃のステツキを發見致し、買ひ求めてより、些か朗かに相成候。先生もステツキを買はれたら、どうですと、水をさせば、僕の氣に入つた奴が無いからネと、申され、大阪で小生と一緒に飲んだオデン屋で忘れた愛用のステツキを想ひ出され、残念がつてゐられ候様お見受け申し候。愈々明日は松山の五健先生や大阪以來の馴染み曉童君、などに會見致す可く、今宵は久しぶり早寝と相定め候。（別府萬屋旅館）

Y・A さま 六月十日 午後十一時半  
今朝九時五十分大牟田發途中、熊本驛下車、一汽車遅らし、無数の隧道をくゞり、阿蘇山經由夕刻七時十分別府に無事到着仕候。凡そ五時間の箱詰の強行軍に、小生完全に疲勞その極に達し、かて、加へて、數日來の睡眠不足の爲、全く生氣無之、投宿後、先生に明日の松山行程を小生のみ中止致し、暫く別府に止り靜養したきむね、申出候處、五十を過ぎた俺がこんな

に張り切つてゐるのに、若い先生が、七月號「川、雜」の

へ埋没して此の山を「狸ヶ丘」と名付けて新支那へ送りました。

### 狸の死

鈴木石鹿

明治九年二月十四日附の朝野新聞に落語そのまゝの記事を見た。開化を誇る當時の新聞が如何に狸の記事とは云ひながら、人を馬鹿にしてゐたかに興味を感じる。

舊御殿山の荒物屋とか水菓子屋とかの裏には毎晩／＼、狸がボン／＼腹鼓を叩くので喧しくてたまらぬ故亭主が今夜は一番狸を困らしてやらうとて四斗樽をボン／＼叩くと狸も又ボン／＼叩き出し互にボン／＼叩いてゐる内亭主は最早手が疲れたれど狸は中々止めぬ故負けてはならぬとおかみさんが代つてボン／＼叩きおかみさんがつかれると亭主が叩き代り／＼にボン／＼叩いて居ると狸の叩く音がよわつたが夜明けて見ると大きな狸が裏に死んでゐたと云ふ評判であります。

### 狸は酒を飲むか

吉田水車

水商賣の店先きにチヨコナンと座はる狸公はきまつて酒徳利と通帳を持つてゐる。單なる物數奇の初めたものでもなさそうである。何か酒と狸との關聯がありさうに思ふが私は未だ狸が酒を好むと言ふ事を聞かない、一度五健先生に伺つて見たいと思ふて居る。

〇〇を選してゐられる間、傘をさして僕はあちこち歩いた。地獄巡りを思ひたつたが時間に餘裕が無さうなのでやめる。もと／＼そんな所に興味を持たぬ僕だから、諦めも可いよ。晝まへ旅館に戻り旅装を整へて、宿の番頭が別府一と紹介して呉れた東洋軒で晝食をとつたが、先生の口からと僕の口からと両方から期せずして、美味いネと洩した。一寸この味はアラスカやガスビルの洋食にもない豫期せないものだつた。隣席に見たことのある顔だなど思つたら、それがロサンゼルスのおリムビツク大會の走幅飛で優勝した南部忠平だつたのも意外である。午後一時三十分解纜の錦丸に乗り込んだ。別府の町よアバヨだ。別府／＼と聞かされてゐたが、何でい、といつた氣持である。地獄巡りも極樂巡りも馬鹿げた客引であつた。さあこれからは君達の待つてゐる大阪に戻つてゆくのだ。有難いつ。いはゞこれで九州全島とお別れだ。大牟田の好漢、抱逸よ、達者で暮せ、とかなんとか……。

を横断してゐる。汽車と違つて、船中は手足がのびせて、すつと樂である。それに、最もいいことは将棋がさせることだ。ボーイにチップをたんまり、はづんでやつたのでサービス満點。お茶に特別のお菓子をつけて來たりしてふふふ笑はせやがる。甲板の娛樂室で好敵手を見つけたので三番、将棋を指してゐると、先生が、君御飯だよと、知らしに來て下さつた。ハイハイと空返事をして勝負に相手の打ち負けるのを見極めてから船室に戻る。君、君どうだい、この肉の罐詰はボーイのサービスだよと、先生のくすぐつたさうな顔。ヘーンげんぎんなどもすなアと僕も同室の船客に些か氣がひける。

もう一時間程すれば、愈々高濱に着く。狸の話で有名な前田五健氏、慌て者でキリキリまいこの熱情家曠童とも久しぶり逢へやう。大學出のインテリ松山支部幹事の赫堂は、前名の蛇の鷹がアブノーマルをもじつて名付けた男だけ一寸面白い人物らしい。特異な川柳で、詩精神豊かな山本耕一路にも逢へるかしらん。數へてゆけば松山には多士濟々だ。この向きだと雨はやみさうもない。

# 化膿症

齒槽膿瘍 齒齦炎 中耳炎 著膿症 扁桃腺炎 丹毒・濕疹 トラホーム

内服により化膿菌を殺滅し、根元的に短期に治癒を促進する。

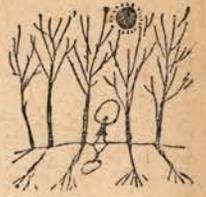
甘錠 五十錠 百錠

## アールズ錠

東京 山之内薬品會社 大坂

A 289

（高濱行錦丸にて）



# 同舟近詠

松山 前田五健

學歴が何んだと云ふがさうゆかず

貯金々々みんな父の財布

蜜豆は長男長女二女と母

勉強の薬中江の水を呑み

メンヒルへ神代ながらの朝の霧

筏悠々洗濯へ話しかけ

仁川 池田可宵

詩の國のチヨコリのひもに風があり

恩給を抱いて會社へ天下り

手にとりて見たやと思ふチマのひざ

兵庫縣御影町 長崎 柳秀

約束はあんた次第と受け流し

僕はいゝ僕はいゝがと異議を持ち

思ふことづけ云へてゆかず後家

腰をのす居職の父に老いを知り

神戸 潮田明坊

子へ返書一と風呂浴びてからにする

掛けかへも活けかへもして夏近し

元利揃へて来て広く座るなり

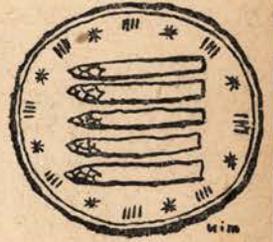
ボーナスがキヤツチポールを呼びに来る

今治 長野 野文庫

訓練だからこの邊で切り上げる

隣組百姓に智慧借りる用

善人の頼み甲斐なく役立たず



## 狸雜筆 (其の二)

### 或る秋の夜

岩崎 柳路

滿洲事變直後、私は同業の堀といふ男と、滿洲東邊道西安炭礦城内の或る支那宿で同宿してゐた。彼は私の撫順、奉天時代に深太樓と云ふ雅號で川柳を指導し、當時は本社へ佳吟を相當投句してゐた男であつた。

或る秋の夜二人は夕食をすまして語り合つてゐると、宿の土壁の裏を滿人の夜廻りが破れ太鼓を叩きながら通つて行つた。月の澄みきつた秋冷えの夜であつたので、其破れ太鼓が狸の腹鼓の様に聞えて來た。堀君は遠く滿洲の奥地で故郷にゐた少年の頃を追憶してゐたかのやうであつたが、其の夜まじりと次の如く語つた。

「僕の郷里は青森縣下八の戸なんだが、或晩母親に持病が出たので何時もの町醫へ薬をとりに行つたんだ。時雨模様だつたので菅笠を着て田舎道とぼく歩いて行つたが、薬を貰つて歸る頃はすつかり空がはれて、月が美しかった。噂で聞く狸が出るといふ竹藪まで來たが、あまりの淋しさに恐さが先に立ち、章駄天走りで小半町も通りぬけ、ひよいと前を見ると、

一本の棒が立つてゐる”そうら出たぞ”と眼をつむつて走りつづけた。再び眼を開いて見るとまだ棒が立つてゐる。冷汗をかきながら村へ着くなり見なをしたが、棒は矢つ張り鼻先にぶら下つてゐる。今度は度胸を決めおむるに顔をあげて睨つけ、頭を左右上下に曲げて見たが、頭の曲がる方へ棒がついて廻る始末だ。もう家も近いので、冷静に凝視して見ると、なんだ棒がついて廻る筈、菅笠の前に太い藁すべがぶら下つてゐて走る方へついて廻つてゐたのだ、恐しさに眼の錯覺を起したんだね

(B)

狸は何故「妊娠」の神様として祭られぬかと申しますと、雄までおながが大いからださうです。

(C)

全國至る處に、養狸組合迄出來て、一時はなか／＼お盛んな様でしたが、やつぱりねえ。

(D)

お狸山のお狸様は、それを追駈廻す獵師達にはちつともお祟りには成らずに、何の罪も科もない村の人達を、それも特に善良な人達を、崖から突落したり、泥田へ捻ぢ込んだりなさるので、「それは無茶ではありませぬか」と、大親狸様へ申上げると、「そ／＼がそれ、畜生の淺間しさであるぞよ」と、おほせられました。

### 狸 A・B・C・D・E

小畑自由朗

(A)

村の國手先生が、眼滿の研究で博士に成つてみせるんだと、大變な意氣込みで、狸を五六匹、其の腹をたち割つて見て「あかん」と、

(E)

神に祭られる狸あり、心齋橋筋の店頭にぶら下げられる狸あり、肝々、吾宿命論を傾聴せざる人達よ、此の事實實證を以て如何となすにや。

花 花 花 花 花 花 花 花

環 籠 花 花 花 花 花 花 花 花



フロリスト

くれない

大阪市西區京町堀通リ三丁目  
電話 土佐堀五一三〇番

奈良縣田原町 嶋田翠峯

家政婦の生れを聞けばお家柄  
お妾と云ふ商賣もあるのなり  
父の顔線畫に描けば皺ばかり

松江 勝谷山川兒

白疊の間舊體制の頃のもの  
お妾の家で中氣になり給ひ

主催者の方もねむたい講習會  
蟲が好かぬ奴のズボンに折目あり

山口縣 三原狂路

大掃除もう空堀も出てくれず  
今ツ更ら「お百姓さん」とは蟲がいゝ  
國債を子の無い夫婦出して見る

長野縣 高峰柳兒

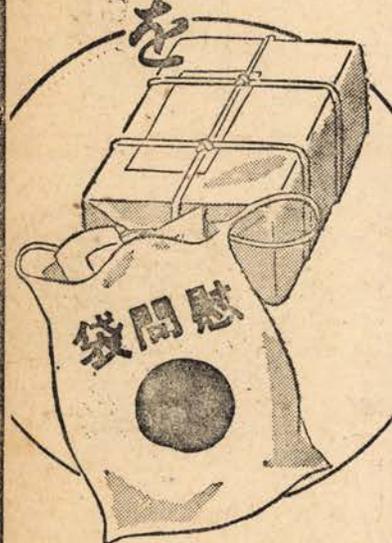
轉業へまづゼニアイキ値踏され  
遠足の子等に車窓を占められる  
轉業のしなやかな手をいたわられ

名古屋 鈴木可香

醫者として自らに盛る麻酔藥  
まごゝろへ字の巧拙はいふまいぞ

戦線の將士へ  
白衣の勇士へ

# 慰問品



慰問品賣場一階



店貨百向用實  
**松坂屋**  
橋本日・阪大

## 住職と大入道

橋本美奈子

オカッパの頃近所の寺の住職が  
話してくれた狸はこつつをもち  
て通る人を道いつばいに足を廣げ  
て通さない。顔を見上げるとゲン  
グンのびて終ひに人が後へひつ  
り返へる、その拍子に素早くこつ  
つを取つて逃げる。住職の父親  
がこの目に逢つたのです。住職も  
一度同じ目に逢ひ話を聞いてるだ  
けに、ひつくり返らない先にその  
股を抜潜つて一目散に逃げ歸つた  
と言ふことです。

## 八疊敷の謂

淺田右聞

日本學術協會の旅行團に加はり  
京大名譽教授田邊朔郎老博士と同  
宿した事がある。其頃博士の御話  
に日本の音楽は大抵四拍子だが、  
只三つだけ三拍子がある。之は  
音楽といへぬかも知れぬが、法華  
の太鼓と刀銀治と金箔の打方とで

ある。其金箔は狸の皮を二枚重ね  
た間に金を挟んで主人がトント  
と叩くと二人の弟子が同じ所をトント  
と叩く。狸の皮を使ふと一匁の  
金が正に八疊敷の箔に廣がるのだ  
さうである。之れが狸の金玉八疊  
敷の由来だとあつた。

## 狸曰く

逸見灯竿

僕の勤めてゐる國民學校に、一  
匹の狸を寄附した父兄がある。何  
でも海岸の新開地で、生捕つたの  
だといふ。其の狸君曰く、昔は山  
中で道を迷つては狸の仕業だとか  
何とか言つて、責任を俺達に轉嫁  
する人間が多かつた。然し近頃は  
世の中が開けたと見えて、迷信論  
者が少くなつた。それのみか、俺  
達がかうして國民學校の庭の隅の  
方へ置かれ、洩垂れ小僧氏に面接  
出来るやうになつたのである。元  
來、小生は内氣なので、多くの小  
僧に顔を見られるのがきまりが惡  
い。此處の校長先生は、頗る親切  
である。俺の食べ物の世話から、

## 雨の降る宵

酒井斗風

しとしとと降る宵である。  
離れの溝椽にカタコトと下駄の音  
がする。「ソラ早く寝ないから  
豆狸が化けて來た」と言はれて、  
眼をつぶつて眠らうとすると、一  
入身が縮んで、息が益々はずんで  
來る。私の生涯の記憶はこんな第  
一頁で始つてゐる。四歳頃のこと  
である。北國に生れた私は、立山  
の雪女の傳説と、狸の話は、いや  
と言ふ程聞かされてゐる。酒好き  
な私と豆狸。このコンビは豆狸の  
方から断るだらう。

狸雜筆 (其の三)

狸と狐の腕比べ

姫田 夕鐘

淨願寺の禿狸へ京の伏見の何とか言ふ豪い狐が腕比べに讃岐へやつて来た。よしとばかりに禿公は松原と高松の殿様の行列になつて通行するから見物してをれと言つた。當日下りに下りにとあまりにも鮮かな行列ぶりに思はず松の木の上で觀てゐた狐は「禿、大したものだ」と大聲で褒めたてた。忽にして家臣のものに取押へられてしまつた。禿は當日殿様の行列を知つてゐてまんまと智略に掛けてしまつた。

狸への小徑

大森 風來子

或る夏の夕方、ひとのよい彼はなぜかしら公園の樹陰の薄暗い檻の中にゐる狸の目玉を見たくなつた。しかしその途中、狸のことはすつかり忘れて彼の足は釘づけされてしまつた。……ベンチによりそつて語り合つてゐる幾組の中に、だまされたとも知らず思ひつづけてゐた彼女の姿を見たから。彼は踵をまげた。

ためきと油揚げ

橋本 波夢造

今は昔……また私が高等小學生だつた頃學校の附近のうどんやに「ためき」と云ふのが始めて出来た。今ではもうどこにでもあつた。しいが蕎麥かけに油揚げを載せたものである。成る程きつねがうどん

かけに油揚げを載せたものなら蕎麥臺ならためきとは御尤千萬なのだ。私が始めてそこに悪友に連れられて學校歸へりに入つた時、まだためきの何たるを知らぬ時分だつたので「ためき二つ!!」の聲に應じて運ばれた井鉢の中の、生憎と度色濃く揚げられた油揚げを狸の身だと騙されて眞實にした事があつた。思へば初心だつたものであるあの時分が頗る懐かしい。

宿直室の夕又キ

水谷 鮎美

宿直のひとりきり社務をすませてしまふと夜食は電話をかけるのが例なんですよ「モシモシ更科です。か阪神の本社の宿直室へ夕又キ(そはに油揚げを入れた麵類)一つ持つてきて下さい」「夕又キ一つへイまいどおはきに……」

ためき幻想曲

鈴木 九坡

これは幼き頃のものがたり。凡そ昔より怪異なることを、狐狸の類の仕業ならん、など如何にも妖怪變化の本尊みたいに言はれる狸のこと故、さぞかし恐ろしき動物であらうと子供心に想像してゐた。案に相違して、その頃よく鈴玉を呉れた父兄が、實は「狸おやち」といふ名前であつたりしてこれはと許り少々不思議に思ふうち、愈々學校に上ると遂にあのキ



募集句 一路集

古本 東魚選

一頁ぬけて古本間に合はず古本の間へ虎の子を隠し古本の今日焚付と落ちぶれる古本の著者とは知らず安くする易の本のいつそ古いあたりそう改版が次々に出て値が下り古本の時價をうか／＼知らず賣り古本屋 今日も何やら裏を打ち古本の勿體なくも御製集古本に埋もれて作家志望なり古本の變體假名を祖母にき、全集の一冊缺けて哀れ也夜店立つ夜から夜までの本を借り篤學の人のであつたらしい本古本屋 奥の方からじろりと見古本の 女名前にふと惹かれアセレン 瓦斯に風あり古雑誌講呈とある先輩の著書を買ひ古本の 落丁惜しく繰り返へし轉勤の度に古本整理され古本になつて露營の手に届き星空をほめ 古本屋 片付ける古本をみせて床屋は待たせる氣重量で 買つて何月號で賣り古本へあぶなく落ちる 水つ洩篋底の 古書へ女房苦笑ひ

彌生 古本にはさみ忘れた小紙幣が出スエオ 古本も少し婆アさん 菓子を買ひ懸山 古本を買ふ氣で讀んで買はずに出梅香 轉勤の度に古本ふえてゐる逸 古雑誌 蜜柑の汁のシミがあり八重 女給部屋 古雑誌などとり散らし天歩 古本の讀みたいところが抜けてゐる帆船 古本屋一つはたいてまける也かつみ 月遅れ讀んで 女工の晝休み久枝 遊學の古本漁るのにもなれ詩朗 風呂敷の古本これは 賣る積り右鹿 興のない古本美容室はこみ一鉢 鼠また古本へ來た音を立て牛歩 宿直の部屋に 表紙の取れた本美奈子 古本の 紙魚の跡さへしたしまれ茂路 赤い過去持つて古本屋の主柳風 古本屋 私立大學出た噂白柳子 月遅れなど、慥言ふとれず同 古本屋もとは左翼の闘士とか半休 古本屋賣らんでもよい 受け答へ同 古本屋賣らんでもよい 紙ナイフ抱逸 傍線の箇所に惹かれて古書を買ひ同 古本や反古の値段にして背負ひ勝二 (佳)古本をあさる脚氣の友に逢ひ同 武士

ヨトンとして呆けた様な顔をした本物の剝製を見るに及び、心ひそかに期待してゐた怖い物見たさのスリルは雲散霧消、そしていさゝかこの愛嬌者に期待外れに似た感じを抱かされたものです。

### 電報ニテ

多田市多樓

ケツキヨク ハタヌキ デンボニ  
バケタダケ イチタロ

### 悪戯を愛す

米澤 曉明

狸の滑稽味と理論で推せぬ悪戯を愛す。狸眼も亦然り。されば御都合主義の狸眠りにもせよ、その必要に迫られし心情にはむしろ同情の念さへ浮ぶもの。併し何時の代にも同じながら筆國の理想達成に邁進すべき皇國の大使命を前にして怠情・利己に立脚した狸眼的態度——闇・買溜等々——は眉唾

もの？

### ためきは化かす

長野 文庫

六七年前の事だが當市目抜き川の川岸端通に「ためき」と云ふうどん屋が開業した。二階の軒先へ棚の下げて看板とし、入口には狸が酒買ひに行く姿の等身大のヤツを置いてあり、開業初めは一丈人気が沸いて中々繁昌したものだ。

或日筆者の近所のMと云ふ中学生が其處でうどんを食つて出ようとした途端にYと云ふ先生と出合ひ目と目がカチリと衝突した。兼てからうどん屋への出入りは嚴重に禁止されて居る上、相手が學校一の矢蓋し屋のY先生と來るとるからこりや只では濟まんと思つたが兎に角脱兎の如く逃走した。さて翌日は薄水を踏む思ひで登校したが不思議な事に何の音沙汰もないのでマア安心と胸を撫で下して居ると晝の時間に同じクラスのSと云ふのが職員室へ呼ばれて悄然として戻つて來て曰く「全く馬鹿々々しい話よY先生が君は昨夜うどん屋から出よつたがあれはどうしたのだと云つてどうしても承知せないので弱つたよ、幸な事にアリバイがハッキリして漸く許して貰つたが、Y先生余程どうかしてるネ」と云つたが可笑しいやら氣の毒やら笑ふに笑はれず心の中で「矢張りためきは化かすものだなあ」と筆者は語つたが、ためきを思ふにつけてその事を想ひ出す。

も 後 銃  
も 戦 線

## 版 田 膽 寫 版

大阪市此花區上福島北一

株式會社 阪 田 商 會

## 雷

### かほる選

- (佳) 古本の中で瘦せてる 古本屋
- (佳) 妻何時か月遅れ買ふ歳となり
- (佳) 古書端然として 紫檀の机
- (佳) 清貧の 資産古本ばかりなり
- (軸) 古木屋即、剩錢を本へのせ
- (軸) こりや生キがいゝと古本通を振り
- 雷の音 壯大な 移民村
- 雷が 鳴つて 昔の話が 出
- 雷に いつしかブル みんな去に
- 雷が 落ちて 松の木 見上げられ
- 雷へ 朝顔の 鉢しまいに 出
- 雷に 笑はれながら 蚊帳を 吊る
- 蚊帳の中 靜かに 遠雷 聞いてゐる
- 待望の ニュース 邪魔をする
- 雷が 落ちて 出勤の 話題 出來
- 雷が だん／＼ 遠く 馬を 解く
- 雷へ しなを作つた 怖がり 様
- 雷を 電氣と 知つた 五年生
- 雷に 忘れた 傘を 思ひ出し
- 雷が 遠くへ 去つた 窓の 風
- 眞暗で 雷の 音 聞いた だけ
- 雷に 花火の子供 呼び 入れる
- (佳) すねた子へ 丁度 雷 鳴つて 呉れ
- (佳) 雨コート 雷さんに 慌ててる
- (佳) 雷へ 淋しく コーヒ 賣られてる
- (佳) 雷が きらひな 犬を抱いて やり
- (佳) 雷へ 車掌と お客 仲がよい
- (軸) 雷に ボタンを 一つ 見失ひ
- 小雅子
- かつみ
- 柳風
- 呆人
- 東魚
- 同
- ふじ彌
- 和坊
- 秋風
- 晴美
- 柳風
- 巨人
- ユリエ
- 双虎
- 久枝
- みづほ
- 春童
- 市多樓
- 詩朗
- 耕一
- 晁
- 一龜
- 翠芳
- 千斗
- 美奈子
- 博行
- 白峰
- 葉光
- 八九滿
- かほる

## 水 泳

### 久米雄選

- 水泳着ばかりの 映畫 雜誌 なり
- 水泳の まつすぐに 向く 水平線
- 水泳着 去年の 海の 香がし
- どの 顔も 水兵さんは 泳げさう
- 競泳に 勝つた 子供の 自慢 なり
- 拔手もう ポートに 勝てぬ ことを 知り
- 水泳 歸り 鼻の 頭を 教へられ
- 水泳へ 母の 慈愛の 守り 札
- 秋風 遠泳の 頭張るらしい 顔が 浮き
- 晴美 水泳の 外に 取り柄のない 男
- 柳風 水泳の 體に 美しい 白い 雲
- 巨人 水泳の 體に 美しい 白い 雲
- ユリエ 競泳へ アナウンサーも 泳ぎをう
- 双虎 遠泳に 海の 青さが せまる なり
- 久枝 水泳着 淡路の 上に 雲が あり
- みづほ よう泳ぎ まつせと 太い 足を出し
- 春童 カメラから 逃げて 海水着が 乾き
- 市多樓 純綿へ 織ぎが 大きい 水泳着
- 詩朗 水泳は 我流 飛沫を 派手に 上げ
- 耕一 水泳の 教師 叩いて 褒める なり
- 晁 夏の 河童が 仰ぐ 青 空
- 一龜 泳げない 男ひる 寝の 趣味が あり
- 翠芳 海水着 母は 小さく 娘に かくれ
- 千斗 (五) プール 今立つた 七つの 水煙
- 美奈子 (五) 飛込臺に 立てば 遙かな 雲の 峰
- 博行 (五) プール 開き 緑の 影と 波と ゆれ
- 白峰 (五) 出養生 泳ぎの 群に 遠く あり
- 葉光 (五) 傳説の 池で 變人 泳ぐ なり
- 八九滿 (人) 水泳に 先生さまを 信じ 切り
- かほる (地) 泳げない 姉さん 砂に 何か 書き
- (天) 遠泳の 疲れ 勵ます 富士が 晴れ
- 鶏城
- 久枝
- 洋子
- 十四之
- 翠坊
- ライト
- 和坊
- 抱逸
- 春千代
- 一龜
- 呆人
- 久枝
- 梅香
- 美奈子
- 双虎
- ライオ
- 風來子
- ふじ彌
- 市多樓
- 青雲
- ユリエ
- 九坡
- 小城子
- 彌生
- 洋子
- 眞理子
- みづほ
- 千斗
- 史路
- 不二
- 葉光

▼七月十八日夜、関西精動作家協  
會では大阪府並に大政翼賛會大  
阪府支部後援の下に銃後奉公文  
藝講演會を軍人會館で開催し  
た。講師は情報官井上司朗氏、  
文學博士成瀬極氏、田村木國  
氏、食瀨南北氏、尾關岩二氏、  
挨拶川田順氏。

### 川協の★

▼日本出版文化協會の第一回總會  
が去る六月廿五日午前十時から  
早稲田大學前、大隈會館で開催  
され、出席會員二千五百餘名中  
川柳ではきやり吟社主幹村田周  
魚、川柳雜誌社主幹麻生路郎の  
兩氏が出席。



氏樂平泰と山葉双

きら開依士校學民國の城鳳鳳洲滿  
左め斜の綱横・山葉双綱横は央中  
氏樂平泰川菊が下

▼堀口九萬一(花林洞)氏の手から  
路郎會長の短冊一葉並びに「川  
柳雜誌」が政變前の松岡外相の  
手に届けられた。

▼水谷鮎美氏(川柳人協會理事長)  
は阪神電鐵株式會社産報會の川  
柳部を擔當され、八月五日に第

### 狸

—路郎選—

天王寺山を知らない狸ゐる  
拜まれる身になり狸おひはてる  
善人と思へど狸だましたり  
考へ込んでゐる姿狸檻の隅  
呑めもせぬに狸徳利を持たせられ  
先代の徳を狸に慕はれる  
化けもせず狸こまめに檻を這ひ  
山門に別の狸がゐる月夜

彩池  
水客  
鮎美  
萬的  
夜王  
美知夫  
紫香  
健作

まん晝にもならぬ狸を見て歸り  
夕月に笠のけて見る化け狸  
安い家聞けば狸が出るような  
化けそうな奴から狸皮にされ  
童話劇狸憎まれ役にあき  
ちと酔つた狸和尚になり切れず  
祀られて狸今日から働かず  
夜道して狸の方もあわてこみ  
腹づゝみ打つ狸食うてゐず  
淋しさに狸は雨を見送つて  
焼物の狸をみれば雄ばかり

翠光  
八歩  
アート  
紅多呂  
彩池  
健作  
九一  
彌生  
帆船  
満潮  
彩池

狸など祀り儲けるつもりなり  
酒蔵の隅で狸の子が生れ  
化けるやうかと狸の檻へ二人立ち  
狸出るうわさのとて日が暮れる  
嘘を書く筆は狸の毛だと云ふ  
養狸場たぬきはせまく子を育て  
實績があるのか狸徳利さげ  
動物園こゝは狸もまゝならず  
化け過ぎた狸とう／＼嫁に行き  
斯う化けて見よと狸は子を育て  
難産に狸は醫者をよびに化け

白柳子  
潮花  
紫香  
翠光  
春美  
帆船  
満潮  
彌生  
一路  
同郎

▼須坂町の高峰柳兒氏は震源地か  
ら一里ほどの距離なので、數日  
を経て戸外に避難されてゐる  
強震振りであつたとのこと、し  
かし御家族は御無事だそうで何  
よりである。遙にお見舞申上げ  
る。

▼朝鮮川柳協會では「川柳  
朝鮮」の第四號を皇軍慰  
問號として刊行した。  
▼東亞川柳聯盟では六月八  
日新京陸軍病院慰問句會  
を開催した。  
▼非常時局下、銃後柳人の  
活躍は目覺ましいものが  
ある。一層の精進を祈る。

▼大島壽明氏(新京)は安東  
に旅行され「鴨綠江に日  
本の端を見て歸へり」の  
句を寄せられた。  
▼増田東魚氏(北京)は北京  
情緒を盛りあげた「夏の  
北海」と題した一枚劇を  
寄せられた。「嗚呼の白  
塔、朝日受けをて北京小  
姐の丸い肩」の如き。  
▼文化映畫「子供の合宿所」  
は國策文化映畫協會作品  
で川柳人協會員掛飛吉宣  
氏の揚影。

▼長野縣の烈震は被害の範圍が長  
野市の東部に限られたそうで、  
松本市の石曾根氏、名越新  
華氏、湯田中温泉の中島紫痴郎  
氏、中野町の金井有為郎氏等は  
何れも被害が無かつたそうであ  
る。

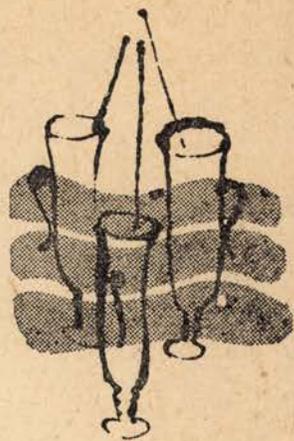
國報 險保

なか確てくき大

# 命生本日

# 愚談 御祈禱

小畑自由朗



喰つついてから二十年にもなる此頃に成つてから、思ひ出した様に女房の腹が、もく／＼とふくれ始めたので、「脹満ぢやなからうか」と、八百屋の勘さんは、心配しながらも嬉しかった。「今からでも遅くはねえ、俺が七十一で此奴がちよと兵隊の検査に成る」而し、女の兒だつたら、と思うと、なんだか、その嬉しさが、約五割程遠う様に思へてならないので、驚いともあらたかと噂の高い、鬼子母神さんへ、御祈禱をしてもらひに行つたのである。

堂守さんは白髭をしごきながら云うのだつた。

「二圓のにしなざるかな、それとも五圓のにしなざるかな」

「二圓と五圓はどの様に違ひますので」

「二圓のはただ御安産のお祈りだけぢやが、五圓になると、男の兒が欲しくば男の兒をとな」

「へい、それぢやその、五圓の口を是非お願ひ申したいんで」

「成程、あゝ、それから念の爲に

聞いときますするが、一人でよいな」

「へえ？」

「拾圓の御祈禱ぢやとな」

「へい」

「双兒か三ツ兒をつかあはることもなつとりまするのぢやが」

「へえ」

「時節柄でもあり、お園の爲にもどうぢやな」

「へい、そいつあ、一つべん娘の奴とも相談をして來ねと、どうも」

「御尤、ぢやあ、始めからあんまり慾張らんとおきなざるかな」

「へい」

「それぢや、今日は幸ひ、ひまな様ぢやから、篤と念を入れて、御祈禱をして進ぜるでな」

「お有難うさまで」

「あゝ、それから、これも念の爲にさいとくまでのことで、決してお進めするわけのものではないのぢやが、御禮詣りには何か、寄進でもなさるおつもりかな」

「へえ？」

「それならそれで、其由を先に申し上げとくと、一層に御利益があらたかな様ぢやでな」

「へえ？」

「御禮詣りは、米一俵というのが習しになつとる様ぢやが、何分、時節が時節ぢやでな」

「へえ？」

「今お米でとお願ひ申しといても、其時に成つて間違ひがあつては、却つてなんぢやからな」

「へい」

「何しろ鬼母子神様はあらたかすぎる方でな」

「へい」

「それがその、罰をぢやな」

「へい」

「親のお前さんたちに當なさるのなら兎も角、生れた子供に當てなさる様では困るでな」

「そ、そいつあどうも」

「それでは、ちよと、此の間から、本堂の屋根の葺替えの寄進を受付とりまするぢやで、お金でということにしておきなざるかな」

「へい」

「では、其由を、今御祈禱と一緒に申し上げてお願ひしとくでな」

「へい、何分共に」

「それならそれで、其由を先に申込んだ。」

すると堂守さんは「そんな答はない答ぢやが」と、首をかしげ乍ら「兎に角一度お伺ひして見様」と鬼子母神さんの前にひれ伏して、暫し、突如、きつと成つて向き直ると、別人の如く、おそろしや神懸りの状態で「やよ勘兵衛」といとおごそかにのたもつて曰クには、「つ、しんでうけ賜れ、そもそちに玉の如き男の兒をつかわす答なりしも、はからずも此の度さる尊きお方の御子息が、御園の爲に戦死あそばしたれば其の御身代りとしてそちの兒を其の方に廻せしものなり、さればそちの方へは其の尊きお方様の姫君をつかわせしものにして、此の度そちの家に生れたる子供はそちの兒にしてそちの兒にあらず」

「え、？」

「勿體なや其姫君は、世が世ならばそちら如き身分卑しき者の兒として生れ給はるにはあらねども、時よ時節にはかのう可も不非」

「へい」

「そちらが如き者の家に生れ給へるこそかしこきさわみと、夢おろそかに致すではないぞ」

「へい」

「而し、其の姫君にて氣に入らぬとあれば致し方なし」

「それならそれで、其由を先に申し上げた」と、一層に御利益があらたかな様ぢやでな」

「へえ？」

「御禮詣りは、米一俵というのが習しになつとる様ぢやが、何分、時節が時節ぢやでな」

「へえ？」

「今お米でとお願ひ申しといても、其時に成つて間違ひがあつては、却つてなんぢやからな」

「へい」

「何しろ鬼母子神様はあらたかすぎる方でな」

「へい」

「それがその、罰をぢやな」

「へい」

「親のお前さんたちに當なさるのなら兎も角、生れた子供に當てなさる様では困るでな」

「そ、そいつあどうも」

「それでは、ちよと、此の間から、本堂の屋根の葺替えの寄進を受付とりまするぢやで、お金でということにしておきなざるかな」

「へい」

「では、其由を、今御祈禱と一緒に申し上げてお願ひしとくでな」

「へい、何分共に」

「それならそれで、其由を先に申込んだ。」

すると堂守さんは「そんな答はない答ぢやが」と、首をかしげ乍ら「兎に角一度お伺ひして見様」と鬼子母神さんの前にひれ伏して、暫し、突如、きつと成つて向き直ると、別人の如く、おそろしや神懸りの状態で「やよ勘兵衛」といとおごそかにのたもつて曰クには、「つ、しんでうけ賜れ、そもそちに玉の如き男の兒をつかわす答なりしも、はからずも此の度さる尊きお方の御子息が、御園の爲に戦死あそばしたれば其の御身代りとしてそちの兒を其の方に廻せしものなり、さればそちの方へは其の尊きお方様の姫君をつかわせしものにして、此の度そちの家に生れたる子供はそちの兒にしてそちの兒にあらず」

「え、？」

「勿體なや其姫君は、世が世ならばそちら如き身分卑しき者の兒として生れ給はるにはあらねども、時よ時節にはかのう可も不非」

「へい」

「そちらが如き者の家に生れ給へるこそかしこきさわみと、夢おろそかに致すではないぞ」

「へい」

「而し、其の姫君にて氣に入らぬとあれば致し方なし」

## オムニコンドックス

### 非特異性全免疫元

「速効命を召上げ」  
「え、ッ？」  
「改めて男の兒を下げつかわす可し」  
「元、冗談ぢやねえ」  
「女の見でも文句は入りません」と、平あやまりにあやまつて、米一俵分の、本堂の屋根葺代を寄進さしてもらつたのであつた。

本剤は非特異免疫學說に準據して高度の免疫力を有する異種蛋白、リポイド及び脂肪を主体とせるものなり。

(適應症概要)

流感、各種肺炎、肋膜炎、傷寒、麻疹、中耳炎、産褥熱、其他各科、急性、慢性、炎衝性、傳染性、敗血症、並に化膿性疾患に對し廣汎に涉り薬効を奏す。

(特長)

注射無痛、副作用絶無、用法簡單、薬効迅速、價格至廉。

(包裝)

二〇〇管入 二〇〇管入  
一〇〇管入 一〇〇管入  
二〇管入 二〇管入  
一〇管入 一〇管入

發賣元 株式会社黒田薬品商會  
大阪、東京

# 各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿清規 ▼用紙は原種用紙▼文字を正確に▼開催月日及場所記入▼締切は毎月廿五日▼投稿先は本社宛

## 支那事變第四周年記念川柳會

(本社)

七月五日

於 御津八幡宮

出席者(順不同)

路郎・紫香・鷹丸・水客・美知夫・寄  
典史・一鉢・平行・九一・健作・石鹿  
扇生・正路・帆船・要兒・玲之介・  
彌生・斗風・秋星・柳風・かほる・翠  
光・千斗・紅多呂・滿潮・恒明・壽彦・  
夜王・晴美・萬的・白柳子・鮎美・ト  
居・彩泡・八歩・里十九・豆秋・ア  
ト・葎乃

席題「うす笑ひ」

五選

うす笑ひして支那人に似たる顔 扇子仙  
君も未だこゝにゐたかとうす笑ひ 由布  
商人のお世辭もいらぬ切符制 正路  
うす笑ひして女中に歳を聞く 恒明  
儲けてることにしておくうす笑ひ 要兒  
ポーナスの行衛ふゝと笑ひだけ 夜王  
うす笑ひそれが喧嘩の種となり 平行  
うす笑ひ祭の酒のことにふれ 滿潮  
儲る話もうす笑ひなぞしてす 九一  
うす笑ひ女の嘘を聞てゐる 水客  
うす笑ひしてポン引の曳れてゐる 斗風

うす笑ひしてボツクスの隅により 美知夫  
うす笑ひ南京豆をむいてゐる 扇子仙  
親分へ度胸を見せたらうす笑ひ 斗風  
うす笑ひ西陽をさけて目をそらし かほる

席題「グライダー」 夜王選

少年の希望グライダーにのせ 翠光  
グライダー少女大氣を深く吸ひ 千斗  
父さんを満足させたグライダー 正路  
朝露の清さへグライダー引き出され 紅多呂  
グライダー生徒が遠く列を敷き 紫香  
グライダー子供の智慧に親の智慧 滿潮  
グライダーの影は芝生を流れゆく 萬的  
グライダー緑の風に乗つてくる 石鹿  
グライダー入道雲の横をとび 紫香  
グライダー西陽の中を下りてくる 同  
明けかゝる島を指しグライダー 千斗  
セコンダリー音なく夏の雲に浮き 潮花  
ブライマリー直射の下の汗もよし 水客  
追風とはつきり知つたグライダー 正路  
日本の伸ぶ日は来たりグライダー 夜王

席題「尺八」

滿潮選

尺八の音色へ暑さ忘れられ 彌生  
物干で吹く尺八へ月が出る 紫香  
尺八の音をきいて涼み盡 秋星

コーヒーが入ると尺八おりてくる 美知夫  
新婚と云ふ尺八の音が聞え 水客  
新築の椽に尺八とゐる 同  
尺八を一本持つて旅戻り 彌生  
尺八をやめると風が吹いてゐる 九一  
南京の月に尺八吹く兵舎 扇子仙  
尺八の師匠も弟子も無口なり 紫香  
尺八の艶も實めとく奥座敷 要兒  
尺八を隣の犬が追ひかへし かほる  
尺八の音へ散歩の足が向き 一鉢  
借金を忘れ尺八磨いでゐる 帆船  
尺八を代用食の息で吹き 千斗  
三越に來て尺八を聞いてゐる 扇子仙  
梅雨空を見上げ尺八拭いてゐる 水客  
部隊長の遺品尺八包まれる 扇子仙  
アパートの孤獨尺八もてあそび 斗風  
敵艦を前に千鳥の曲終り 彩泡  
尺八の海月の濱へ來てしまひ 鮎美  
尺八は月が落ちたのに氣づき 夜王

席題「蚊」

水客選

考へて居る首筋と蚊は知らず 玲之介  
飛べぬ程吸ふた蚊がうらめしい 正路  
はつたをたゞいて蚊を逃したり 柳風  
説諭する巡査の片手蚊を追うて 美知夫  
蚊を拂ひくる野天風呂 紫香  
蚊柱を少うしよけた立話 同  
蚊遣香母の膝なる稽古本 潮花  
憎い蚊は潰して見てもあつけなし 玲之介  
佛壇を出てくる蚊をば逃したり 鮎美  
もう歩く子に叩かせる背中の蚊 玲之介  
蚊柱をよけずに這入る旅歸へり 水客

兼題「祖國」

白柳子選

幾山河祖國の夢をだき續け 翠光  
聖戦の祖國へ歸る血を湧かし 夜王  
萬歳はいつか祖國の方を向き 寄典史

兼題「避雷針」

かほる選

勝つてゐる祖國の歴史にもよれて 九一  
輸血して祖國の旗の風の下 鮎美  
祖國嚙々玉乗りとして迎りつき 玲之介  
千人針祖國の人の血が通ひ 滿潮  
軍艦マーチ今や祖國を出でんとす 紅多呂  
松葉杖祖國の土を踏む日なり 水客  
移民村祖國の春を語り合ひ 健作  
祖國離るゝ船から旗が破れ落ち 萬的  
もう船に祖國の風が吹いて來る 恒明  
パラシュート祖國の糸で織られて來 紅多呂  
天祐と奇蹟祖國の土をふみ 彩泡  
船出する準備祖國の水を積み 千斗  
祖國の便りロソク消えかゝり 滿潮  
簡単な便りににじむ祖國愛 斗風  
慰問團に訊くは祖國のくらしむき 扇子仙  
甲板に總出祖國の雲を見る 紫香  
戦傷に祖國の母を忘れまじ 鮎美  
聖壕の中で祖國の無事を讀む 恒明  
風おちて祖國のにはひ死がちかし 鮎美  
高下駄を履いて祖國の街を褒め かほる  
祖國へ遠く君ケ代をよくそろひ 八歩  
馬の糞祖國の匂ひして暮れる 水客  
祖國みな二合三勺にて足れり 豆秋  
ふしんする音を嬉しく聞く祖國 かほる



川 松山支部句會 (松山)

六月十一日

山本耕一路報

大將になれば墓參も騒がれる 鶏 城  
新妻へ我が家の祖先説く墓參 緑 風  
菩提所へ今日一日は一人 大 觀  
墓參の歸途を水だきへ寄る 曉 童  
墓參りちるとかけに世逢ふなり 耕一路

川 松江支部句會 (松江)

六月五日

於 恩敬寺  
勝谷山川兒報

鐵かぶとぬけば風あり小休止 俊次郎  
日が落ちて歸る子供は下駄をさげ 同  
勇氣とは戀打明けることでなし 笑 々  
空閑地防空壕を掘ると云ふ 同  
カーテンの中に顔あり厚生車 青 嵐  
急カーブちらり見知つた顔がある 糸 葉  
持主が變り緑の空閑地 荒 路  
急カーブ過つちやいけぬ人が来る 快 哉  
警笛は一人前の厚生車 同  
ベンチはげ鐵さびいくさ續くなり 同  
あるだけの勇氣で娘モンベはき 同  
田舎道はだしの子供のすこやかさ 榮 兒  
世界動亂鐵はかくれんぼしてゐる 山 川 兒  
水銀は昇る跣足の百姓だ 同  
とんぼの目はだしにちやちや知てる 同  
跣足の子わざ／＼通る水溜り 可 明  
厚生車吠えつく犬をもてあまし 同  
急カーブ皆機御用心願ひます 湖 雪  
空閑地こゝも銃後の人の熱 錦 葉  
打ち明ける勇氣がにぶる星の数 登 美 也  
新妻の値切る勇氣はまた持たず 同  
空閑地見逃しはせぬ町内會 大 鳥

川 岡山支部句會 (岡山)

鈴木九坡報

階段を一足飛びに朝の驛 九 坡  
階段の一步々々疲れて居 ユリエ  
招待券貰つて困るたのみごと 信太郎  
一枚の招待券を錢でくれ 灯 竿  
隣組招待券を恩にきせ 同  
招待券行く氣になつた身ごしらへ 眞理子  
新交又點三角な店が建ち 風來子  
交又點叱られながらまた急ぎ 信太郎  
交又點あたふた横切る國の母 耕 水  
トランクが泳いで渡る交又點 風來子  
號外を讀み／＼やつたなと思ひ 耕 水  
號外屋もつれる人へほつて逃げ 灯 竿  
決心をしたと日記へ書きつゞけ 九 坡  
又胃かと笑つて醫者がはいつて來 灯 竿  
泥棒のやうに胃散を飲む夜中 同  
胃病ふと何杯目かと考へる 九 坡  
胃病もう癒つたことにしたビール 同  
品切れの土産がほしい團體旗 耕 水  
破りたくない三越の土産もの 信太郎  
土産箱中味を知らぬのも混り 風來子  
土産また途中下車から一つ殖え 同  
お土産を持たぬ座布団おちつかず 九 坡

川 鐵道病院支部 (大阪)

六月二十二日

於 近江分室官舎  
北川春東報

日に焼けて來たゞけの魚籠渡される 某人  
葬式の歸り往診遠慮なし 九 官  
遠慮すなと言はれ上衣を脱いだだけ 萬 的  
遠慮なく來て留守宅をまごつかせ 水 虹  
不遠慮な記者團母が出てくれる 同  
後ろからあふがれてからとる團扇 某人

川 竹原支部句會 (廣島縣)

五月五日

於 芳泉居  
梶川芳郎報

道しるべやつと讀み取る分れ道 芳 泉  
分れ道後振りむいて欲しいひと みづほ  
夕燒の空を見上げた別れ道 芳 郎  
一錢の端小聲で負けるなり 斗 秀  
一錢の辻占にさへ氣が迷ひ 芳 郎  
五月廿日  
雲を突くばかりのベルが暮れ残り 芳 泉  
臨終を醫者ははつきり告げて立ち 愛 鳩  
想ひ出はしばし讀書の眼を外し 斗 秀

川 布哇支部句會 (ホルル)

五月廿一日

於 宮王葛彌居  
前山北海報

時の人訪へば順番長いこと 覺花麗  
たまさかの訪問犬と話して來 同  
よう來たと言はれ無心を言ひ遮り 葛 子  
番犬に睨まれながらベルを押し 千代樂  
訪れる勇氣もなやんだるあげく 一 浪  
とし頃の娘さんたちのよい日向 松 籟  
長女の結婚生活を見て

川 豐中支部句會 (豐中)

六月十四日「螢狩の會」

黒川紫香報

螢狩り道案内は我が子なり 和 坊  
はたかれた螢地べたで光つてゐ 萬 的  
別れともない女心へ螢とぶ 水 客  
後から聲をかけてる螢狩り 潮 花  
勉強の窓に螢が迷ひ込み 鷹 丸  
螢とればほろ／＼露が手にこぼれ 紫 香  
螢狩り水の流れが聞えて來 水 客  
美しい顔を螢の灯へまとも 風 葉

川 四ツ橋支部句會 (大阪)

青空の風に素直な鯉幟 久 枝  
春の風ようこそおれは無帽主義 嘘 川  
特報の風に病人目をさまし 春 巢  
公園の風へ夫婦で吹かれに來 同  
風が出たらしい夜釣の灯をみつめ 水 客  
潮風に男の唄が飛んで行く 萬 的  
五月五日  
御時世へ妻は買溜する氣なり 覺花麗  
子の顔の汚れうれしき健かさ 北 海  
日本から孫の安産札が來る 同  
遠慮せよスカートに吹く向ふ風 友 樂  
ゴシップへみな熱心な顔ばかり 伯 樂  
逆境へ訪問の人跡を断ち 北 海  
低氣壓訪問客は女です 友 樂  
訪問者買へて女房の氣が直り 沙 兆  
訪問者着せてますが板に着き 快 夢 起  
錦着ての故國訪問夢と消え 伯 樂





# 後記

▼いつもなら、汗みづくになつてベンを走らしてゐるところが、天候異變でちつとも暑くならない、いささか拍子抜けのかたちだ。▼本號は例年の如く特輯號とした非常時局を乗り切るのには、餘裕が必要だ。期が過ぎが必  
要だ。飄逸が必要だ。そこで題材を「運」ととつた。張り切るのめい、が、日本人は竹のやうにボキンと折れ易いので、本誌では明らかなネバリを持つことの運動に着手した譯だ。▼高麗野鈍氏の「旅の手紙」は好評だつた。本號はその續きた。ますます面白くなる。あと一回で終る豫定。▼小畑自由明氏の愚談「御祈禱」は迷信打破問題の喧しい時に、これを粗上にしただけに面白く讀み物である。あほらしいやうなことを掘へて何んとか物にしてゆく自由明氏の腕も凄い。▼戸田孤蓬氏の「川柳世界史」は氏の根強い努力にたゞ感心するばかりだ。▼近來原稿が夥しく輻輳するので次號へ割愛したものが多い。筆者も讀者も諒とされたい。▼不朽洞會員の申込みが急に殖えた。入會の席順を争ふ盛況である。そう云へば購讀者も激増した。この分ならまだ殖えそうだ。(路郎)

# 柳 界 展 望

## 催

▼本社旬會(七月五日夜) 松坂俱樂部麻生路郎川柳講座(七月六日・二十日午後一時)・有慎俱樂部

部川柳講座(七月十日・二十四日)阪大川柳會(七月二十一日午後四時)警察病院川柳會(七月二十二日)以上いづれも路郎主幹出席。▼川維尼崎支部旬會は七月二十日夜開催、水谷鮎美氏出席。▼川維大洲支部は七月十二日標影居に於て創立旬會を開催した。出席者は標影・曉明・南葉・脈水・不麗・いわね・夢夢・可洲・京司・曉風・柳水庵の諸氏。▼多田市多樓氏(不朽洞會員)は國鐵關門トンネル貫通祝賀川柳大會を七月十八日日和山鐵道職員集會場で開催され各方面より多大の諷刺を受けられた。▼渡邊曉童氏(不朽洞會員)を圍む川柳の夕は松山では七月十三日に今治では七月十六日に開催された。▼川維早鐘會(大牟田)では七月四日旬會を開催。

## 消息

▼路郎主幹は六月廿四日東上、翌廿五日早稻田大學大隈會館に開催第一回總會出版文化協會第一回總會出席された。午後二時から阿部佐保蘭氏の東道で村田周魚氏、福田山雨樓氏等と共に堀口九萬一氏を訪問、その夜は横濱の山雨樓居に一泊、翌廿六日は再び東京に出て用務を辨じ廿七日静岡の榎田竹林氏を訪問雨に閉ざされて終日歌談、廿八日朝、歸阪された。▼橋本綠雨氏(不朽洞會員)は綠雨川柳文庫目錄を謄寫して知友に頒たれた。後進のい、參考資料だ。▼中國地方川雜各支部では今度

松江支部をも加へ、がつちりとスクラム組んで川柳報國に一意邁進することになった。▼植山九天氏(不朽洞會員)は七月十六日夜、廣島の濱田久米雄氏(不朽洞會員)を久振りに訪問歌談された由。▼櫻川不水氏(不朽洞會員)は七月九日長崎の植山九天氏(不朽洞會員)を訪問され、長崎濱莊に於いて由氏他柳友と柳論に花を咲かされた。▼杉原大研子氏(不朽洞會員)は六月中旬山陰方面へ旅行され、左の句を寄せられた。「出雲をば今日品切の口惜しさ」旅の傘今日は流石に梅雨の入り。

▼小畑自由明氏(不朽洞會員)は六月十日に第二世幸司君を儲けられました。▼水谷鮎美氏(不朽洞會員)は六月二十七日女兒道子さんを儲けられました。▼故酒井大樓氏の令嬢頼子さんが六月十七日に男子を挙げられました。

## 轉居

▼道廣世紀彦氏(不朽洞會員)は大阪市北區都島北通一丁目四七七へ。

## 改號

▼岩崎松翁氏(不朽洞會員)は勇記と再改號された。▼沖原春秋子氏(松山)は綠風に。

## ★社の廻覽板

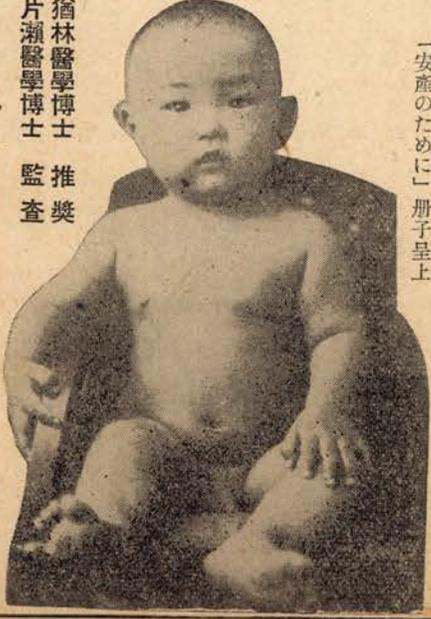
▼左記の諸氏が新たに不朽洞會へ入會された。下關 國弘半休氏(多田市多樓氏紹介)、大阪 道廣世紀彦氏(戸倉普天氏紹介)、姫路 岩崎水虹氏(北川春葉氏紹介)、山口縣 岩崎

勇記氏(多田市多樓氏紹介)、大阪 阿萬萬の氏(岡田某人氏紹介)、大阪 谷川綠風氏(杉原大研子氏紹介)、大阪 青柳扇子仙氏(丸尾潮花氏紹介)、尼崎 小林文月氏(水谷鮎美氏紹介)、尼崎 酒井美知夫氏(水谷鮎美氏紹介)、尼崎 飯尾寄典史氏(水谷鮎美氏紹介)、大阪 浪玲之介氏(水谷鮎美氏紹介)、大阪 小川恒明氏(戸田孤蓬氏紹介)、京都 野口柳太氏(正本水客氏紹介)、川維大鐵局支部幹事更迭、舊幹事正本水客氏、新幹事野口柳太氏、川維大牟田支部幹事更迭、舊幹事高田抱逸氏、新幹事田中蝶人氏。



にめたの

妊娠としての大切な責任はカルシウムを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。



片瀨醫學博士 冊子呈上  
「安産のために」

片瀨醫學博士 推奨  
片瀨醫學博士 監査

# カルシウム錠

大阪道修町 和田卯助商店

支部分と幹事

道頓堀支部(大阪)萬よし  
 函館支部(函館)巖修  
 梅田支部(大阪)結美  
 藤川支部(鳥根)緑之助  
 鳥取支部(鳥取)鐵州  
 松山支部(松山)耕一路  
 天王寺支部(大阪)八九満  
 鶴町支部(大阪)双虎  
 御池橋支部(大阪)いわを  
 松江支部(松江)山川兒  
 大鐵局支部(大阪)柳太

西條支部(愛媛)英賀夫  
 城南支部(大阪)申仙  
 今治支部(今治)文庫  
 維光笑會(大阪)里十九  
 竹原支部(廣島)芳郎  
 廣島支部(廣島)風來子  
 豐中支部(豐中)紫香  
 下關支部(下關)牛休  
 北鮮支部(羅津府)美笑  
 蒙疆支部(張家口)柳路  
 上海支部(中華)天作

鐵道病院支部(大阪)春葉  
 渚支部(大阪)みのる  
 四ツ橋支部(大阪)翠芳  
 布哇支部(布哇)覺花麗  
 堺支部(堺)角堂  
 岡山支部(岡山)九坡  
 尼崎支部(尼崎)美知夫  
 日和佐支部(徳島縣)賢次  
 早鐘會(大牟田)蝶人  
 大洲支部(愛媛縣)椋影

主幹 藤生路郎  
 贊助員 池澤樂居  
 長谷川一徹  
 大道弘雄  
 岡本一平  
 片岡直方  
 笠原路生  
 嘉納純  
 田中辰二  
 長崎柳秀  
 長岡半太郎  
 長野晴演  
 藤野之助  
 藤本卯之助  
 顯原退蔵  
 淺田一  
 末弘巖太郎  
 客員 鳥山一步  
 沖野三郎  
 大島三郎  
 大谷五郎  
 龜井花修  
 川村花菱  
 米村あん馬  
 米村孝之介  
 田村素文  
 谷脇素文

高尾亮雄  
 生方敏樓  
 窪田銀波  
 山本雨迷  
 安川久留美  
 前田五健  
 柴谷春雨  
 篠原春二  
 蛭子省二  
 藤里好古  
 森東魚  
 不朽洞會員  
 橋本緑雨  
 高橋かほる  
 福田山雨樓  
 西田山雨樓  
 永田里九  
 奥村丹路  
 岩崎柳路  
 寺井鏡々  
 大西一歩  
 高澤孤蓬  
 戸田孤蓬  
 石井白面人  
 川出美根子  
 中島生々庵  
 戸倉普天  
 小畑自由期  
 古川風竹

前山北海  
 古川麗石  
 岩崎山石  
 藤井友郎  
 米本貴志郎  
 三輪晚翠  
 内谷美翠  
 水谷鮎水  
 大坂形水  
 田中雨月  
 橋本佐夢造  
 藤岡至藝瑠  
 西川青美  
 北山悟郎  
 姫田夕鐘  
 村松夕鐘  
 市場没食子  
 吉田水車  
 妹尾八九満  
 須崎豆秋  
 春元紀太  
 後藤青兒  
 宮岡白峰  
 石曾根民郎  
 中西おさむ  
 中原史客  
 正木水客

丸尾紫香  
 丸尾潮花  
 岩橋双虎  
 岡田陽人  
 岩崎松代  
 岩元陽子  
 北井巢風  
 布川巢風  
 小笠原巢風  
 尾崎方正  
 押谷たけを  
 押谷たけを  
 關根山彦  
 西尾山彦  
 多田波菜  
 櫻川波菜  
 中川波菜  
 中原波菜  
 濱田久米雄  
 好崎申仙  
 杉原小松園  
 魚住滿潮  
 岩本雀踊子  
 清水友帆  
 清水秀雄  
 石野史路  
 清水史路  
 西川愁水

中内翠芳  
 多田多樓  
 濱田宗男  
 大森風來子  
 玉井彩泡  
 鈴木九坡  
 逸見九坡  
 石原九坡  
 植木九坡  
 夷邊石笑  
 鈴木石笑  
 渡邊石笑  
 矢野石笑  
 高野石笑  
 高野石笑  
 國弘石笑  
 道廣石笑  
 岩崎水虹  
 岩崎水虹  
 阿萬萬記  
 青柳風子  
 小林文月  
 酒井美知夫  
 飯尾寄史  
 小川恒明  
 野口柳太  
 浪之介

募 集

第十八卷第十號課題  
 八月廿日締切  
 (十句以内)

滿員 岩崎柳路選  
 空堀 須崎豆秋選

第十八卷第十一號課題  
 九月廿日締切  
 (十句以内)

地 圖 大島濤明選  
 獨 立 石曾根民郎選

第十八卷第十二號課題  
 十月廿日締切  
 (十句以内)

食 後 奧村丹路選  
 名 人 菊澤小松園選

每號募集 (毎月五日締切)  
 近作柳樽(千鶴吟)  
 川柳塔 麻生路郎選  
 同舟近詠 麻生路郎選  
 各地柳壇(會報)

文章(評論研究感想吟行漫文漫畫)  
 投稿規定  
 ▲投句は本社發賣の投句用箋、官製必書又は同型の原稿紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。  
 ▲「近作柳樽」は全作家の雑吟を募る。「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。  
 ▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事。  
 ▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。  
 ▲書體はなるべく楷書(川柳雜誌原稿)と封筒に朱記の事。  
 ▲締切は厳守されし。  
 ▲投稿其他につき御問合せはすべて返信封入の事。

規格外B列5號  
 川柳雜誌 第十八卷 第八號  
 毎月一回一日發行

定 一册 金三〇錢  
 半年六册 金一圓八十錢  
 一年十二册 金三圓六十錢  
 (送料六錢)  
 (送料十二錢)  
 外國送本には海外郵送料費の加算を乞ふ  
 御注文はすべて前金で願ひます。振替(大阪七五〇五〇)又は小爲替を御利用願ひます。御注文は何月迄より御指示願ひます。轉局又は改裝等の節は舊併記の事

昭和十六年七月廿五日印刷  
 昭和十六年八月一日發行  
 禁無斷轉載 本誌の刊行は有保證新聞紙法に據る

廣告 本誌廣告に御用の節は川柳雜誌社廣告部へ御一報下さいますやう。

發行所 川柳雜誌社  
 大阪市西區江戶堀上通二丁目四六番地  
 電話 三三三三番  
 三三三三番  
 八六一四番  
 振替 大阪七五〇五〇  
 電話 土佐堀  
 行前入 麻生 幸二 郎

東京市神田區淡路町二丁目九番地  
 配給元 日本出版配給株式會社

★每號、戦線の勇士に送られたい方は部隊名をお示しの上本社宛に御申込み下されば郵税を奉仕して直接發送致します。

# 工場・家庭の必需品

無害・不燃・防錆・無色・無臭

## トミフ液

新興洗液

### 主なる用途

ペンキ及びウエスの再生  
 リノリウムガラスの汚れ  
 タイル張・木床・建築物  
 機械・化学・自動車各工業  
 艦船機関・汽車・電車  
 印刷・活字洗  
 食器・家具・被服のシユミ  
 襟・垢（毛織物・スフ）  
 手洗  
 ◇其他凡ゆる洗滌に好適◇

所 業 營 トミフ 元 發 賣

大阪市南區日本橋筋二丁目（電話戎二一七九）

# ガラス壺代用 紙容器

金屬代用紙罐  
紙コップ

丸形・角形・小判形・  
組立式各種・藥品・食  
料品・菓子等の容器と  
して最適

大阪市住吉區晴明通二丁目四〇番地

## 二葉屋商店

電話事務所用 天下茶屋  
工場用 同  
五八〇二番  
五八〇三番  
五八〇四番

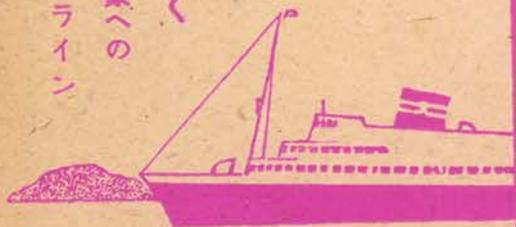


# 船の旅

大陸は招く

満支蒙への

OSKライン



—景遊書内案—

大阪商船

# 海

園園  
子檀  
甲香

海水浴場

七月一日開場

阪神電車

# SENRYU ZASSHI

Published monthly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

## りとびきに

# 美顔水

蚤・蚊・南京虫等の  
毒虫でカユい時!

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、殊に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重寶がられてゐます。

▼ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の薬です。ニキビや吹出物でお困りの方に大きな喜びの糧! ぜひお勸したい薬です!

▲定價一瓶四十五錢・六十五錢・一圓三十錢。全國藥店にあり



是	吹	ニ
非	出	キ
此	物	ビ
藥	に	・

阪大・京東

## 館天順谷桃